
オタリーマンのゼロ魔生活外伝集

アグカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オタリーマンのゼロ魔生活外伝集

【Nコード】

N1076R

【作者名】

アグカ

【あらすじ】

本編外伝やネタ話、その他諸々についてはこちらへ移動した。

あらすじや設定については、「オタリーマンのゼロ魔生活」本編をご覧ください。

なお、こちらの外伝には、ゼロ魔と全く関係ない話も出てきますのでご注意ください。利用規約改定に伴い追加、「技名、魔法名、人物名などに原作となる小説、漫画、ゲームなどから一部お借りしている（転載）部分があります。」

外伝：もしテファに召還されていたら・・・（前書き）

「なんか、脳内妄想が沸点突破してしましまして・・・
すんませんっこんな話書くつもりなかつたんですけど、
ほとぼしるパッションを抑えられず・・・

最近。造が脳内で『熱くなれよ！！』と連呼してまして・・・
まあ、ノリで書いたお話です、本編とは一切関係はないっすw
では、どうぞ」

外伝：もしテファに召還されていたら・・・

「・・・うう・・・こ、ここは？」

「あ、あの、大丈夫？」

「え？」

声のした方を向くとそこには・・・What?なんですか、あれ？あの巨大な二つの膨らみは・・・あ、あの目が離れません、つか、離せません（；、、）

「・・・どうしたの、私のことじつと見て？」

「あ、い、いや・・・その・・・なんでもないです・・・」

い、いえない、胸を凝視してますなんて、言えやしないよ！でも、本当にここだろうか？さっきまで白い空間にいたんだけど・・・つか、あの空間もなんだかよくわからないし・・・

「・・・あ、あの、すみません、ここはどこでしょうか？それに君は？」

「ここはウエストウッド村よ。それと、私の名前は『ティファニア』、『テファ』って呼んでね。」

What? Really? It is not a lie?

まてまて、もちつけ、クールになれ、クールに・・・ヒッヒッフー、ヒッヒッフー・・・ふう落ち着いたぜ・・・つか、なんで目の前に乳神様こと「ティファニア」様がいらっしゃるのでせうか？なんというか、うん、凄まじいですな、バストレヴオリューション・・・

「あの、あなたのお名前は？」

「あ、ああ、すみません、申し遅れましたが、私は『藤崎充』と申します。」

あくまで紳士へんたいに対応せねばな。心象悪くして嫌われたくないし・・・

「珍しいお名前ですね。」

「は、はあ・・・まあ、そうですね。」

「それより、なぜ、私がここに・・・」

「あ、あの、実は・・・」

そういつてテファは自分が召還したことを語り始めた・・・つまりですね、ここはゼロ魔の世界で確定なわけですし、俺はテファの使い魔というわけですか・・・うん、OK、バッチコイ！！テファの使い魔なら喜んでやりますとも、ええ、やりますともさっ！！！！

「だから、今から契約をしたいんだけど・・・いいかな？」

「はっ、どうぞ！（ハアハア）」

「じゃ、いくね、じつとしてね・・・チュッ」

キタ——（。。）——！！もう、この瞬間に死んでもいい！！！！乳神様がファーストキスの相手なんて、もうね、我が世の春ですよ！！！！！！ああ、おかあちゃん、生んでくれてありがとう！！！！！！

「グッ・・・」

「だ、大丈夫・・・？」

「な、なんとか、大丈夫ですよ・・・」

くそっ・・・それにしても、ルーンが刻まれるときは本当に痛いな・・・場所は胸か・・・やっぱバストレヴオリューション繋がりのか？まあ、テファの使い魔になれると思えばこの程度耐えてみせるさっ！！！

「・・・ふう・・・治まりましたよ。」

「よかった・・・」

「それにしても、使い魔というのは、一体？申し訳ないのですが、私はどうもこの辺りの常識などには疎いようでした・・・」

「あ、うん、使い魔はね、主と一心同体で一生を共に過ごすの・・・だから・・・あのね・・・私と、その・・・お友達に・・・」

「はっ！全力全開力の限り貴方と共に！！！」

やばい！マジ可愛い、何この生物？！もうね、元の世界なんてどうでもいいですっ！捨てます、捨てますともさっ！！テファにお願いされちゃ、もうね、断る理由なんて微塵もありません！！！！

「よかった・・・私ずっと一人だったから・・・」

「・・・そうですか。（あくまで紳士^{へんたい}たれ）」

「でも、ごめんね、元の場所に戻す方法がないの・・・」

「構いませんよ、テファ。」

「・・・でも。」

「ここに私が呼ばれたのも、何かの運命なのでしょう。ならば、貴方と共にいることが私の生きるべき道なのでしょう。」

「・・・ありがとう・・・グスッ」

「涙を拭いてください、テファ、貴方にそんな顔は似合いませんよ。」

「・・・ポツ」

おっしや、ナデポじゃないけど、好感度up!!これは、いい感じではなからうか、つか、まじで我が世の春がきたかも。

「それでは、私も以後ここで暮らすことになるわけですね?」

「うん、私一人しかないから・・・」

「そうですか、でも、これからは私も一緒にいますよ、テファ・・・」

「・・・うん、ありがとう・・・」

こうして、俺はテファとの同棲生活を始めたわけでして・・・ごめん、我慢できません・・・ギシギシアンアン・・・

・・・キングクリムゾン!!!数年後・・・

「おゝい、テファゝちよつとこつち来てくれないか?」

「はあゝい。」

「パパーーー!!」

「うおっ・・・!」

「えへへ・・・」

「おりよ、『ラナ』も一緒か。」

「うん!」

「こら、ラナ、だめよ、お父さんお仕事なんだから。」

「はは、構わないさ、テファ。」

「ん、もう、ラナには甘いんだから・・・」

「そういうなって、なあ、ラナ。」
「うん！」

まあ、なんだ、そのくあのあと、テファと寝たときにね・・・そのくやっちやいました（笑
んで、すぐさま子供できちゃって、今じゃこの通りですわ。
まあ、これも一つの幸せなんですかねえ。

「どうしたの、タカシ？」

「ん、ああ、テファとであつたときのことを思い出しててね。」

「そう・・・今でも帰りたい？元の場所に？」

「いんや、全然。今はテファとラナがいるからね。」

「・・・そっか。」

「これからも、よろしくね、テファ。」

「うん！」

■ ■ ■ ■ ■ END ■ ■ ■ ■ ■

外伝：もしテファに召還されていたら・・・（後書き）

てーわけで、書いちゃいましたwww
すんません、猛省しております。

ほんとごめんなさい、本編書かずに何書いてんだと言われそうですが、
申し訳ないっすwww

反省はしている、だが後悔はしていない・・・

まあ、これは、本当に外伝なので、ぶっちゃけ本編とは一切の関係は
ありません。

出てきた子供である『ラナ』も、本編では出ないと思いますし。
まあ、お遊びってことで、ご容赦くださいませw

外伝：もしジョゼフに召喚されていたら・・・（誰得（前書き））

ちと思いつきまして、書いてみました。

ジョゼフに召喚されていたら・・・

やば、またデムパがががが

本編更新せずに何書いてるんでしょうねw

外伝：もしジョゼフに召喚されていたら・・・（誰得

「・・・う・・・うう」

「ほう、目覚めたか、まさか人間が出てくるとはな・・・」

「こ、ここは・・・」

「ここはガリア王宮、グラン・トロワだ、我が使い魔よ。」

グラン・トロワ？ それに、ガリアだって？ それってゼロ魔の世界じゃないか！ つーことはこの青い髪のおサーンはあの狂王ジョゼフですか？・・・最悪じゃなか！なんでこいつに召喚されにやならんのじゃ！！ 鬱だ、死のう・・・

「何を落ち込んでいるのだ、我が使い魔よ。」

「いえ、少々自分の状況がつかめませんで・・・」

「ふむ、まあ、無理はないがな、さっさと使い魔契約をするぞ。」

「え、ちょ、まっ」

・・・チュ

オワタ、俺の人生オワタ＼（＾o＾）ノ ファーストキスがおっさんとだなんて、最悪通り越してもう、終了のお知らせじゃねえかよ！ マジで鬱だ・・・死のう・・・

「グッ！」

「使い魔のルーンが刻まれているのだ、すぐ治まる。」

そんなレベルじゃねえってば！ なんだこの痛みは！ クソッおっ

さんにキスされるわ、めちやくちや痛いわ、マジで最悪だぜ！俺
ってこんな不幸なのかよ！！しかも、第4の使い魔って、原作で
能力の説明なかったじゃんか！こんな能力があんのかよ、チート
じゃねえか！くそつたれ、この能力で生き残って絶対もとの世界
に帰ってやる！！

「・・・うう」

「終わったようだな。」

「・・・はい。」

ちくしょー狂王相手じゃめったなことできねえよ、何されるかわか
ったもんじゃねえ！

「あの、これから私は？」

「なに、余を楽しませてくれればいいのだ。どうにも、余の心は乾
いていてな。何をしても、心に小波すら起きんのだ。」

なるほどね、原作と同じか・・・ならば、いつそフェニックス呼び
出してシャルルを復活させちまうか？そうすりゃ、わだかまりと
けてジョゼフもまともになんじゃね？うっし、やっちまおう、俺
が生き残るためだ、世界の理なんぞ知ったことかっ！！

「そうですか・・・失礼ですが、お名前をお聞かせいただけません
でしょうか。私は藤崎充と申します。」

「余はジョゼフ・ド・ガリア。このガリア王国の国王である。」

「左様でございますか、では、ジョゼフ様とお呼びさせていただきます。
早速ですがジョゼフ様、私の能力を使いまして、貴方様の望

みをかなえさせていただきます。」

「余の望みだと？」

「はい。」

「余には望みなどない、ただ、この意味の無い生を少しは楽しくできればいいのだ。」

「いいえ、貴方様には望みがあるはずです。弟君の真意を知るという。」

「・・・なぜ、そう思うのだ・・・」

「契約の際、貴方様の心の奥底にある願望が流れてまいりました。私であればその望み、叶える事ができましよう。」

そうゆうことにしておけば、原作知識のことは話さなくていいしなつか、ジョゼフを真人間にすりや俺の死亡フラグほとんどなくなるんじゃない？ それに、あわよくばガリアでいい生活できそうだしな。

「・・・余の望み、か。いいだろう、試してみよ、少しは楽しめるかもしれん。」

本当に、どうでもいいんだな。無気力というより、生きること自体あきらめている漢字だな。全く、どうしてこうバカばっかなんだろうねえ。

「かしこまりました。では、始めます。」

さて、フェニックスを呼び出すとしますかね。魂を呼び出し肉体を再構成か、結構キツそうだなこりゃ。でもまあ、俺の今後に関わるし気合入れてやりますかっ！

「・・・命を司る不死なる鳥よ、顕現せよ！ 召喚！ 不死鳥『フェニックス』！！」

・・・クエエエエ！！

「こ、これは・・・」

「フェニックス、シャルル・ド・ガリアの魂を現世へ導き、肉体の再構成を。できるな？」

「・・・コクッ」

「よし、『転生の炎』！！」

・・・ボウッ！！

・・・ズアアアア！！

・・・カッ！

「ふむ、どうやら成功したようだな、済まないなフェニックス、無理をさせて。」

「クエエ・・・」

「暫く休んでいてくれ、ありがとう。」

・・・クエエエエ

フェニックスは還ったか。随分無理させちまったみたいだな。今度呼ぶときはもう少しマシなことで呼んで上げよう。

「・・・シャ、シャルル・・・」

「しばらくすれば、弟君は目を覚ますでしょう。そのとき、ご自身の気持ちを包み隠さずお伝えください。そうすれば、王の望みはないでしょう。」

「・・・お前は、一体・・・」

「何、貴方様にお仕えする、ただの使い魔ですよ。少し他と能力が異なるだけのことです。」

「お前の能力なら、余を殺すこともできるのではないか？なぜ、余に従う・・・」

「簡単なことです、王を殺すなど面倒極まりない。私は平穩が好きなのですよ、ジヨゼフ王。」

「・・・ククク、クハハハハッ！！ それほどの力を手にしながらただ平穩を望むというのか、我が使い魔よ！！！」

「ええ、私は面倒なことが何より嫌いですから。」

「ククク、本当にお前は面白いな、これほど愉快的気持ちになれたのはいつ以来だろうなあ・・・」

「これからは、いつでも愉快的気持ちになれるでしょう、弟君と和解できればね。」

「・・・和解か・・・果たしてできるものかな。」

「悔やんでいたでしょう、弟君をその手に掛けてしまったことを。なら、謝ればいいのですよ、心の底からね。王の心は死んではおりませんよ。ただ、届かぬものへの思いが強すぎるだけのこと。そのため他のことに対して心が反応する余裕がないだけのことです。」

そうなんだよな、結局弟を殺した自責の念で余裕なくなってるだけなんだよな、このおっさん。きつとそれが解ければ、まともになると思うのよね。

「……お前は、余を……救ってくれるのか。」

「私は少しお力添えするだけです。自身の心を開放するのは自分以外にありえませんよ。ジョゼフ王。」

「……そうか。」

「さ、弟君を運びましょう。まあ、他の者に見つかるはずですから、王の私室がよろしいでしょう。」

「……む。」

さて、ジョゼフの私室にシャルルを運びますかね。まあ、シャルルが暴走しないように準備もしておきますか。魔法使いそうになったらミュートかければいいだろうしな。

■ ■ ■ ■ ■ ジョゼフ私室 ■ ■ ■ ■ ■

「・・・正直、こうしてみてもまだ信じられん。シャルルが生き返るなぞ・・・」

「まあ、ご自身で殺した相手ですからね。」

「・・・お前は随分と辛辣だな。」

「誤魔化したところで、意味はないでしょう。私は意味の無いことはしませんから。」

「・・・ふっ、余に対してそのような物言いができる者なぞおらんぞ。」

「そうでしょうね。」

話し込んでいると、どうやらシャルルが目覚めたようだ。ま、記憶の混乱がないか確認する必要があるかな？

「・・・うう」

「どうやらお目覚めのようですね、シャルル殿下、目は見えますか？」

「・・・こ、ここは？君は一体？」

「ふむ、目は見えていますな、音は聞こえますか？」

「・・・あ、ああ。」

「視覚と聴覚は問題ないようですね、ご自分がどうなったか覚えてらっしゃいますか？」

「・・・確か、矢に打たれて、その後は・・・」

「ふむ、生前の記憶は問題ないと、まあ、死後の記憶は消えているでしょうから、無理に思い出す必要はありませんよ。」

「生前？死後？どうゆうことだ・・・」

「あなたは一度死んだのですよ、覚えていらっしゃる通りに矢に打たれてね。」

「・・・そう、だったな。では、なぜ私は今生きているのだ？」

「私が生き返らせましたよ、あなたの兄君の命でね。ああ、私は藤崎充と申します。ジョゼフ王の使い魔として召喚されました。」

「……ジョゼフ兄さん。」

「……シャルル。」

さて、これから兄弟の会話だねえ。まあ、殴り合いの喧嘩でもしてくれりゃ話が早いんだけどね。どうなることやら。

「……シャルルよ、すまなかった。」

「兄さん……」

「すでに気がついていられるかもしれんが、あの矢は余が放ったものだ。」

「

「……どうして、そんなことを。」

「俺はな、シャルルよ、お前に勝ちたかったのだ、ずっとずっとそれだけを望み生きてきた。しかし、あのとき次王指名の際、父上は俺を指名した。哀れみを受けたと思った。そしてお前は笑って俺を祝福していた。それが、俺には我慢ならなかった。」

憎さ余って可愛さ百倍の逆になっちまったわけか……。難儀な性格しとるなあ、ジョゼフもさ。自分より優秀と思ってる弟が王に選ばれなかったのに、自分を笑顔で祝福してるのが憎くてたまらないだなんてさ。おまーは子供かつつの。

「万人に慕われ、魔法の腕も天才といわれたお前が王になれず、無能といわれた俺が王になる……。それなのに、お前は俺を祝福した。なぜだ！ お前は、悔しくはないのか、俺に負けたと思わないのか！！ なぜ、お前は……。」

あゝあゝ泣き出しちゃったよ、漢泣きつてやつかね。ほんと、子供だなあ。

「・・・兄さん。」

「俺は絶望したよ、王になろうともお前に勝つことはできないと思つてな。そして、お前を憎んだ。俺に無いものを持つお前を・・・」

「・・・兄さん、僕はね、兄さんこそが王に相応しいとわかっていたんだ。ずっと兄さんには勝てないと思っていた。だから、魔法だけでも勝とうと血のにじむような努力をした。王になるために、周りからの評判を気にして、いつも作り笑いをしていた。僕はね、兄さんが思つような人間じゃない、王になりたい、それだけのために汚いこともしていたんだよ。貴族に金を渡したりもしたよ・・・きっとそんな僕の内面を父上はわかっていたんだろう、だから兄さんを王に指名したんだよ。僕じゃ、王にはなれない、王の器じゃないとね。」

あれまゝシャルルもやつぱり人間だったわけね。ま、そらそうだな、自分の欲望のためには手を汚すのが人間でもんだ。聖人君子なんて、本来いるはずがない。誰だって暗い部分はあるわな。それを認めない人間はただの阿呆だ。

「・・・シャルル・・・」

「だから、あの指名のとき、僕は表面上は笑顔だったけど内心では兄さんを恨んだよ。僕はこれだけ努力した、血反吐を吐くこともあった、なのに、何もしていない兄さんが王になるなんてっつてね・・・」

「・・・俺は、お前に勝っていたのだな・・・」

「うん、そうだね・・・」

「もつと早くに、お前に打ち明けるべきだったのだろうな・・・」

「僕もそうだよ、兄さんともつと話すべきだったんだ、一人で抱えずに・・・」

「・・・済まぬ、シャルルよ！済まなかった！！」

「・・・兄さん！」

いい光景だねえ、この世界の呪縛から解放された兄弟の姿つてのはさ。泣けるぜ。まあ、これでお互いのわだかまりもとけたでしょ。これからはガリアはよくなるんじゃないかね。

「よかったですね、お二人とも。私も骨を折った甲斐があるというものですよ。」

「・・・お前にはどれだけ礼を尽くしても足りんな。」

「・・・そうだね、君がいたから、僕たちは・・・」

「私は背中を軽く押しただけです。和解できたのは、あなた方自身の心によるものです。」

「・・・クク、そうか、お前は本当に面白いな。」

「・・・君は僕たち兄弟の恩人だね。」

「そう言っていたくのは、光栄ですな。」

「・・・しかし、久しぶりに泣いたな、これほどに涙というものは重いのだな。」

「それはそうでしょう、長い間に溜まった涙です、重いでしょうな。」

「・・・本当に、お前にはかなわんな。」

「・・・そうだね、兄さん。僕も彼には適いそうにないよ。」

「私など、ただの若輩者ですよ。」

「・・・クク、謙遜するな、我が友よ。」

「おや、私を友とお呼びいただけなので？これは光栄ですな。」

「・・・お前は我がガリア王家にとって大恩人だ、無碍にするなど
できません。」

「そうですか。ああ、それとジョゼフ王、まだやり残したことがある
でしょう。」

「やり残したと？」

そう、シャルルの奥方、つまり、タバサの母親の治療だな。ま、俺
の能力使えば余裕で直せるからな。ちゅーわけで、さくつと直して
タバサを救いますか。おおつと、それからイザベラも救わないとな。
あの子も犠牲者の一人だし。

「そう、シャルル殿下の奥方の治療ですよ。」

「・・・っ！ お前は本当にどこまで・・・。」

「私の力なら、簡単に治療できますよ。ですので、治療してシャル
ル殿下の奥方とご息女にもちゃんと話してあげてください。ああ、
それと、ご自分のご息女にも目を向けてあげてくださいね。彼女も
犠牲者なのですからね。」

「・・・ああ、そうだな。全く、本当にお前には頭があがらんよ。」

「まあ、私は使い魔ですからね。主の望みをかなえるのみですよ。」

「・・・なあ、我が友よ、全てが片付いたらこのガリアに永住して
はくれまいか？」

「永住ですか・・・まあ、それもいいかもしれませんねえ。」

「なんなら、余の娘を嫁にもらうか？ククク・・・」

「ご冗談を、私は王家入りは御免ですよ。面倒ごとが尽きないじゃ
ないですか。」

「本気なのだがな、余としては。」

「まあ、ご息女については、彼女の気持ちを優先しましょう。」

「・・・そうだな、あれにも苦勞をかけた、今更だが父親として謝らねばなるまい。」

「大丈夫ですよ、心から謝罪すれば想いは通じるはずです、今回のようにね。」

そうそう、イザベラだって父親から認められれば変われるだろうさ。まあ、あのツンツンデコ姫が簡単には変わるとは思えないけどな。からかうと面白そうだけど。

「では、オルレアン邸にいきましようか。シャルル殿下動けますか？」

「ああ、大丈夫だ、問題ない。」

「……すぐにイザベラを呼ぼう、それとシャルロットもな。」

「ええ、そうしてください。ああ、それとシャルル殿下は隠れていまししょうか。いきなり出てくるとびっくりするでしょうし。治療が終わったら出てきてください。」

「わかった。君の指示に従おう……」

「では、参りましょうか、すべてを精算しにね。」

-
-
-
キンクリ
-
-
-

オルレアン邸

いや、すごい光景だね。ジョゼフ、イザベラにタバサと奥方か。ガリア王家勢ぞろいだな。シャルルも別室で待機中だしね。まあ、まだバラしてないからさ。あれだけどね（・、・、・）

「お父様、こんなところに何のようですか？」

「・・・」

「何、シャルロットの母親を治療するだけだ。」

「・・・え?!」

「・・・お母様を治療?!」

「そうだ、我が友がそれを成してくれる、頼むぞ。」

「お任せください、ジョゼフ王。ああ、イザベラ姫、シャルロット様、初めまして、ジョゼフ王に使い魔として召喚されました、藤崎充です。以後お見知りおきを。では、挨拶はこれまでにして早速治療をするでしょうか。ではまずはと・・・『スリプル』」

・・・カク

・・・スースー

「お母様!」

「ご安心を、眠らせてただけですよ。治療中に暴れられると面倒です。さて、次は『ライブラ』!」

ふむ、肉体的には体力や筋力の衰えくらいか・・・精神の方は・・・ふむ、崩壊しているわけじゃないな、体内にある毒素が記憶の伝達を阻害、混乱させているわけか、これなら『エスナ』で直せるわな。

「では、診察が終わりましたので治療します・・・『エスナ』!!」

・・・ピカッ

「はい、終わりましたよ、あとは起きるのをまちましようか。」
「・・・本当に今ので治療が終わったのか？」

「ええ、奥方の症状は体内の毒素により、記憶の混乱と伝達障害が起きているだけですからね。毒素を抜いてやれば自然と元に戻りますから。まあ、起きるまでしばらくかかるでしょうから、別室で待つとしましょう。」

「わかった、イザベラ、シャルロット、ひとまず着いて来い。」
「・・・わかりました、お父様。」

「シャルロット様、心配でしょうが、今はまあ、したがってください。」
「・・・わかった。」

・・・キンクリ（目覚めるまで）・・・

「どうやら、奥様が目覚めたようですね、向かいましょう。」
「うむ、行くぞ、イザベラ、シャルロット。」
「はい、お父様。」
「・・・」

■■■■■■奥方の部屋■■■■■■

「・・・お母様。」
「・・・シャルロット・・・なの？ああ、シャルロット！」
「・・・っ！お母様！！！」

お〜感動的なシーンだねえ。やっぱ人助けはするもんだ、じつちやもいつてたしな！　しかし、タバサのこんな顔、原作やアニメじゃ見なかったもんなあ。いや〜ええもんみれたわ。

「どうやら、問題なさそうですね。」

「・・・そう、だな。我が友よ、本当に感謝している。」

「よしてください、私はできることをしただけですよ。」

「・・・本当に、叔母様が治るなんて・・・」

「そうでなければ、わざわざ連れてこられるわけがありませんよ。イザベラ姫。」

「・・・っ！ふ、ふん、なんだい、偉そうに！！」

「おやおや、随分と気の強いことで。」

「まあな、どうしてこうなったのか、父親としては頭が痛いところだ・・・」

「・・・お父様に言われたくありませんっ！」

「ま、そうでしょうね。ジョゼフ王も随分なへそ曲がりですからね。」

「・・・ククク、確かにな。」

さて、おしゃべり終わりにして、さっさとシャルルと再会させますかね。尺が伸びちまうしな。え？メタ発言はやめろって？いいんだよ、これ、どうせ外伝だし、本編には関係ないからw

「さて、それじゃ、あの方をお呼びしますか。」

「・・・そうしてくれ。」

「では、呼んで参ります。」

「・・・あの方って？」

「まあ、会って見てのお楽しみですよ。」

・・・キンクリ・・・

「お待たせしました、お連れしましたよ。奥方、シャルロット様、よろしいですか？」

「はい、あのそちらの方は？」

「そうですね、まあ、あなた方が待ち望んでいる方ですよ。では、仮面とフードを取ってください。『シャルル殿下』」

「「「えっ?!」「」」

・・・カチャ
・・・バサ

「久しぶりだな、シャルロット、我妻よ・・・」

「・・・お、おとう、さま・・・」

「・・・そんな、どう、して、あなたが・・・」

「ああ、私が生き返らせたんですよ。」

「生き返らせたって、あんた、そんなことができるわけ!」

「事実ですよ、ねえ、ジョゼフ王、シャルル殿下。」

「ああ、本当だ、余の目の前で生き返らせたからな。」

「そうだね、私は本当に生き返ったんだよ。」

「・・・お、おとう、さま・・・お父様—————!!!!」

「あなたっ!」

・・・ガバッ

「すまない、二人とも、苦しい思いをさせてしまったな。すまない！」

「・・・我が友よ、改めて礼を言う。余の家族を救ってくれたことを。」

「礼などいりませんよ。まあ、イザベラ様もちゃんと可愛がつてあげてくださいよ。今までほったらかしだったんですからね。ちゃんと父親してください。」

「・・・わかつている。済まなかったな、イザベラ。余は父親としては最低の男だ、その資格もない。だが、謝らせてくれ。本当にすまなかった。」

「・・・お、お父様・・・わ、私は・・・」

「素直に甘えればいいんですよ、別に恥ずかしいことじゃないんですから。」

「・・・お父様！」

・・・ガバ

「すまなかった、イザベラ、我が娘よ・・・」

やれやれ、これでガリア王家は安泰つてところかね。しっかしまあ、あれだねえ、親子ってないもんだわさ。やっぱり親子は仲がいいのが一番だわね。これから家族として仲良く暮らしてくれることを祈るとしようか。

「これで、私の役目も終わりですかね。」

「本当に我が友には、どう感謝すればいいのかわからぬよ。」

「ああ、そうだね、兄さん。僕もまたこうしてシャルロットと妻を抱きしめることができるなんて。」

「まあ、礼ということであれば、仕事ください。私には帰る手段もありませんのでね。働かないと食べていけませんからね。」

「・・・ククク、本当に無欲だな、お前は。いいぞ、爵位の一つや二つくれてやるさ。お前はガリア王家の大恩人だからな。」

「爵位ですか、貴族相手にするのは面倒ですねえ。」

「そういうな、お前ほどの男を平民と同じ身分になどさせておけるものか。」

「しかしですねえ。」

「なに、領地も王家直轄地をやるつ、権限も最大限に与える、周りから文句が出るなら余が鎮めてやるつ。」

「まあ、そこまで仰るのであれば、ご好意に甘えとしましょうか。」

「そうしてくれ。ククク、しかし、これからは退屈はせんな、シャルルもいることだしな。」

「退屈してる暇なぞないでしょう。いろいろ国内でやらなければならぬこともあるでしょうに。まあ、まずはイザベラ様の結婚ですかねえ。どこかにいい男を捜さないと、まあ、あれじゃないですかね、イザベラ様は素直じゃないところが可愛いですからねえ、実は人気あるんじゃないですか？」

「我が友が貰ってくれば一番いいがな。」

「だから、王家入りは勘弁してくださいってば。私は面倒は嫌いなんですって。」

「なに、王家入りしないでも、爵位を保持したままでもよからう。」

「イザベラを女王として産まれた子に継がせればいいのだからな。うむ、そうしよう!!」

「ついでに、シャルロットも貰ってもらおうか、彼なら安心だ。」

「いえ、人の話聞いてますか、ジョゼフ王？それに、シャルル殿下まで・・・」

「ふはははは、ガリアの未来は明るいぞ!!!」

「そうだね、兄さん、ああ、孫の顔を見るのも近いかな、ふふ。」

「ちょ、人の話きけての!!!このあほ兄弟!!!」

「・・・ふ、ふん!しょうがないから、結婚してやろうじゃないのさつ!!」

「イザベラ様もそんなことってないで、貴女の父親を止めてくださいよ!」

「・・・ピトッ」

「ちょ!シャルロット様もそんなくっ付かないで!!」

「なんだい、私じゃいやだっていうのかいつ!」

「私に被虐趣味はないっす!」

「私じゃ真逆だと言いたいのか!!!!!!!」

「ええ、その通りですね、性格は粗暴だし」

「・・・がんばる。」

「・・・いい度胸じゃないか、調教してやるわあああ!!」

「そつはいきません。しからは御免、逃げさせていただきますっ!!」

・・・脱兎のごとく！

・・・キンクリ（5年後）・・・

「陛下、お産まれになりましたぞ！」

「おお、産まれたかつ！」

「元気な男の子です！」

「うむ、でかしたぞ、イザベラ！」

「お父様・・・」

「婿殿もな！」

「はあ・・・つか、なぜに私はいつの間にやら、ガリア王家入りしてるんでしょうかね、なんか約束違うような気がします・・・はあ、ま、イザベラとシャルロットと一緒になれたからいいですけどね。」

「もう、こんなときまで、そんな恥ずかしいこといわないでよっ！」

「・・・（ポツ）」

「相変わらず仲がいいな、三人とも！」

「ジョゼフ王は、相変わらず無駄に熱いですよね。全く最初にあつたときは別人じゃないですか。」

「余が生れ変わったのも、婿殿のおかげだ！　こうして孫の顔も見れるとはな、本当に婿殿には感謝しきれんなっ！　ははははははは！　！！！」

「やれやれ・・・しっかし、俺がイザベラとシャルロットと結婚するとはねえ、世の中わからんもんだわ。」

「あら、まだそんなこと言ってるの？」

「・・・私達じゃ不満？」

「んなことないって。ただ、こんな美人な嫁さん二人も抱えて幸せだな〜とね。」

「も、もうっ！」

「・・・ふふ。」

「さてさて、これから息子の世話もあるし、忙しくなりそうだねえ。ああ、やること多すぎて手が回らないよ。ほんと、幸せだ。」

■ ■ ■ ■ ■ E N D ■ ■ ■ ■ ■

外伝：もしジョゼフに召喚されていたら・・・（誰得（後書き））

つーわけで、何を思ったか書きちゃいましたwwww

いえね、ほんと、デムパを受信してしまっで、本編書こうと思った矢先になぜかこれを書いてました。

いやーイザベラとかよくキャラがつかめてませんわwタバサも動かしにくいから台詞少ないし。まあ、今回の外伝はあくまでジョゼフが主役なのでwwwwつか、ジョゼフが変わりすぎてますね。いい親父になっちゃいましたよ。まあ、こんなジョゼフだったらいいかなー的な作者の妄想です。

次回からは本編に戻ります。ではー

外伝：恋姫じゃなくネギま！の世界だったら？（前書き）

ちとネタ考える時間潰しのために書きました。

まあ、駄文ですな（；・・・A・・）

外伝：恋姫じゃなくネギま！の世界だったら？

・・・ドゴン！！

「・・・い、いてえええ！！！」

な、何で痛みを感じるんだ？！

俺死んだはずなんだぞ、それがなんで・・・
つか、ここどこだよ、ここがあの子なのか？

「な、なんだここは？」

辺りを見回してみると・・・南国かここは？

遠くにはビーチらしきものも見えるし、近くには・・・リゾートホテル？

なんだか現実世界っぽい感じだけど・・・
どちらにしろハルケギニアじゃなさそうだなあ・・・

「・・・うゝむ、ここは一体？」

「おい、貴様・・・」

「へ？」

そこにいたのは・・・金髪の少女？

大体小学五年生くらいか？

にしては随分と尊大な感じだな。

「貴様、私の別荘にいきなり現れるとは何者だ？」

「・・・あゝ俺にも何がなんだか分からないんだ。つか別荘って？」
「まあいい、どちらにしろ・・・」

・・・パキン！

「ちょ！」

「怪しい奴だからな、遠慮はせんぞ！」

・・・ブオン！

「おわっ！ 何するんだ！」

「ほう、エクスキューションーソードを避けるか」

「当たり前でしょう！ 危ないでしょうがこの幼女め！」

「・・・よ、幼女ではないわ！」

「何言つてんだ、どこどう見ても幼女だろうがっ！ 俺の孫と同じ年くらいじゃねえか！！」

「ええい、私はこれでも六百歳だ！」

「んなの信じられるか、この幼女！」

「だから幼女言うなあああ！！」

・・・ガキン！

・・・ザン！

・・・ドガアアン！

「ええい、この、すばしっこい！」

「いい加減に話聞けっつーんだ、このちびっ子！」

「ちびっ子言うな！ どうあっても死にたいようだな貴様はあ！」
「死にたかないわ！」

ええい、どうなってんだこの少女は！

仕方ない、あまり使いたくはないが動きを止める！

『ストップ』！

「な、なんだ、体が動かん！」

「ふーう、これで少しは落ち着いて話ができるな」

「ええい、何をしたのだ！」

「お嬢ちゃんが聞き分けないから少し大人しくしてもらってるだけだよ」

「だーもう、私はお嬢ちゃんなどという年ではないわ！」

「あゝはいはい、子供は皆背伸びしたがるもんだからねえ」

「・・・き、貴様あああ！」

「つか、お父さんかお母さんはいないのかい？」

「だから、私は！」

「あゝはいはい、落ち着こうね（ナデナデ）」

「む、むう・・・」

にしてもこの少女、どっかで見たような気がするが・・・
なんだったかな？

つか、それよりもどうして俺は生きているんだ？
確かにハルケギニアで死んだはずなんだけど・・・

「おい、何を黙っている！」

「あゝごめんね、考え事してたもんだからさ。そうそうお嬢ちゃん、お名前なんて言うのかな？」

「だから、その子ども扱いをやめろ！」

「あゝそうだね、ごめんね（ナデナデ）」

「うううう……」

「マスター」

「む、茶々丸か」

「あの、そちらの方は」

「いきなり別荘内に現れたのだ」

「あ、この子の保護者の方ですか？」

「いえ、私はマスターの従者を務めます、絡繰茶々丸と申します」

「あ、これはご丁寧に。私はタカシ・シュヴァリエ・ラ・フジサキ・ド・オルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・ド・ラ・ヴァリエールと申します。以後お見知り置きをレディ。」

「あ、はい、どうも……」

「ええい、茶々丸、貴様何を暢気に！」

「あゝ少し落ち着こうな、お嬢ちゃん（ナデナデ）」

「だから、頭を撫でるなあああ！」

「ああ、マスターがあんな風に」

「あゝすまない、レディ、いいかね？」

「あ、はい」

「ここはどこなんだろうか？」

「ここはマスターの別荘の中ですよ」

「……その別荘って？」

「魔法球の中ですね」

「魔法球？ 聞いた事ないな」

「ええい、それよりもこの状態をなんとかせんか！」

「ああ、ごめんごめん『エスナ』！」

・・・カッ！

「・・・ふう、一体なんなのだ貴様は。先ほどのような魔法なぞ見た事ないぞ！」

「あらま、魔法があるのかい？」

「・・・貴様、私をバカにしているのか？」

「いや、そうでなくてだな・・・とにかくその辺の事も含めて一度落ち着いて話をしたいんだが、誰か大人の人はいないかな。それも魔法などに理解のある人で・・・」

「だから私は大人だ！」

「あゝそうだねえ、お嬢ちゃんは大人だねえ（ナデナデ」

「うっうっうっ・・・！」

「ああ、マスターがあんなに・・・撮影しないと」

「こら、茶々丸！ 貴様何を撮っている！」

「いえ、マスターの可愛いお姿を撮影しておこうと」

「ええい、やめんかバカ者！」

仲がいいねえ、この娘達は。

にしても、早めに大人の人と話をさせて欲しいんだがな。

「あゝいいかね」

「なんだ！」

「出来れば早めに大人のひと話をさせて欲しいのだが。俺にも何が何だか分からない事が多すぎてね。早めに整理したいんだ。」

「・・・私が大人だと言ってるだろうがっ！」

「分かった分かった、でもどうみてもそうは見えないからね？」
「うっうっ！」

「あの、学園長にご相談してみては？」

「学園長？　ここは学校なのですか？」

「はい、正式名称は麻帆良学園です」

「麻帆良学園？　と言う事は日本なのですか、ここは・・・」
「そうです」

なんてこった、日本に戻ってきたのか？

つつても、麻帆良学園なんて聞いた事ないしなあ・・・

また現実世界とは違うところなのかなあ・・・

はあ、やっと皆のそこに行けると思ったのに・・・

「あ、あの・・・」

「あ、ああ、申し訳ない。では、その学園長殿にお取次ぎ願えないだろうか。私自身の事も話さないといけないだろうし。」

「はい、畏まりました」

「おい、茶々丸！　貴様なぜこの男の言う事を聞くのだ！」

「お困りのようですし、それに悪い方ではないかと」

「しかしだな！」

「そういえば絡繰さん、でしたね。失礼ですが、貴女は人間ではないですね？」

「はい、私はガイノイドです」

「ガイノイド？」

「女性型のアンドロイドです」

「ほゝそれは凄いですね」

「・・・貴様、驚かんのか？」

「まあ、魔法がある位だしねえ、アンドロイド位居てもいいんじゃないか？」

「というか、貴様も魔法使いなら、私の事を知らんのか？」

「知らないねえ、君のような少女は」

「だから、幼女言っな！ 私は六百万ドルの賞金首でもある闇の福音こと、『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』だぞ！」

「ふゝん、悪戯でもしたのかい？」

「違うわっ！」

「悪い事しちゃだめだぞ、めっ！」

「・・・うううう！ どうあつても子供扱いするつもりかっ！」

「だってねえ、どうみても子供だし」

「だゝかゝらゝ私は吸血鬼の真祖なんだ！ 見た目通りの年齢ではないわっ！」

「へゝ吸血鬼なんだゝそりや凄いな」

「・・・貴様、信じてないな」

「いんや、吸血鬼の知り合いならいるからね。て、そういう事が、それで成長できずに幼女の姿のままなのか。」

「・・・そうだ」

「ふゝん、なら成長したい？」

「・・・もう諦めている」

「ふむ、んじゃ、『サンス・オブ・タイム』！」

・・・シュバ！

「な、何を！」

「マ、マスター、そのお姿は・・・」

「・・・どうなっている、視点が高いぞ？ 貴様、一体何をした！」

「肉体年齢だけ時間を加算したんだよ、大体二十歳くらいかな？」

「な、何だと？！ お、おい、茶々丸、鏡を持って来い！」

「はい、ただいま」

・・・ゴトツ！

「マスターどうぞ」

「ほ、本当に成長している・・・」

「どうだい、これが君の成長した姿だよ、なかなか美人じゃないか」

「なっ？！ う、煩い、褒めてもなんも出んぞ！」

「ははは、恥ずかしがる事はないだろう、美人なのは本当なんだから」

「うっうっ・・・」

「マスターおめでとうございます」

「し、しかし、一体どうやって・・・」

「『時の砂の呪文』を使っただよ」

「なんだそれは？」

「対象の時間を加速させたり戻したりする呪文だね」

「・・・そんなデタラメな呪文聞いた事ないぞ」

「そりゃそうでしょ、俺しか使えないし」

「むう、貴様本当に一体何者なのだ・・・」

「それは学園長とやらのところで話とするよ」

「・・・いいだろう、きっちり話して貰うぞ!」

「分かったよ、ちなみに君の事はエヴァンジェリンでいいのかな?」

「・・・エヴァでいい」

「そうかい、んじゃ俺の事も『タカシ』と名前で呼んでくれ」

「あの、私の事も茶々丸と・・・」

「よろしいのですか?」

「はい」

「では、エヴァちゃんと茶々丸さん、すまないけど案内を頼めるかな」

「・・・ついて来るくがいい、行くぞ、茶々丸」

「はい、マスター」

・・・(移動中)・・・

こうして、学園長とやらのところへ向かう事になった訳なんだが、一体全体何がどうなっているのやら。

死んだはずの俺がこうして生きている事もそうだが、またもや違う世界に来るなんて・・・

俺ってこのままいろんな世界を巡る事になるんじゃないかな?

勘弁して欲しいなあ。

それに、先ほどから妙な視線を感じるんだよねえ。

まあ、エヴァちゃんは美人だから注目集めるのも当然かな。

後はあれか、俺の格好かね。

なんせハルケギニアでの服装のままだからなあ、こっちじゃ珍しいわな。

「しかし貴様、その服装なんかならんのか」

「そうは言ってもねえ、俺のいたとこじゃこれが一般的だし」

「・・・まるで中世のヨーロッパの貴族の服装だな」

「あゝあながち間違いじゃないな、俺貴族だし」

「何？」

「一応領主やってたからね」

「どこのだ」

「言っても分からないと思うよ、なんせこの世界とは違うみたいだし」

「この世界とは違うだと？」

「まあ、詳しくは後で話すよ」

「ふん、いいだろう。着いたぞ、ここだ。おい、爺、邪魔するぞ！」

・・・ボタンッ！

「ほっなんじゃ？！ て、お主エヴァか？」

「そうだ」

「・・・幻術かの？」

「違う、成長したんだ」

「なんじゃと？！」

「こいつのおかげでな、おい」

「こらこらエヴァちゃん、女の子がはしたないよ、めっ！」

「だから、その子供扱いをやめると言ってるだろうがっ！」

「エ、エヴァよ、そちらの御仁はどちら様かの？」

「ああ、これは失礼いたしました。私はタカシ・シュヴァリエ・ラ・フジサキ・ド・オルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・ド・ラ・ヴァリエールと申します。以後お見知りおきを、学園長殿。」

「お、おお、これはこれはご丁寧に痛み入る。わしは近衛 近右衛門と申す、当麻帆良学園の学園長を務めておる。して、お主は一体何者じゃ？ 服装からして日本人ではないようじゃが。」

「その事についてご説明に参った次第です」

「ふむ、よからう、では聞かせていただこうかの」

「はい、では少々長くなりますがご容赦を・・・」

こうして、俺の出自やらなんやらいろいろと話した。

まあ、エヴァちゃんも学園長も驚いていたわな。

そりゃそうでしょ、別世界の人間だなんて突拍子もない話信用できる訳ないわな。

つか、信用して貰うにはこっちから歩み寄らないといけないからねえ。

出来る限りの情報は与えないと・・・

つか、それにしてもここってほんと、どこなんだろうね・・・

なんか聞き覚えのある単語が多いんだけど、どうにも思い出せない。それに住む場所とか仕事とか、いろいろと問題あるよなあ。

はあ、どうしてこう俺の人性は波乱万丈なんだろうつか。

呪われているのかねえ・・・

「とまあ、そういう事でして」

「むう、俄かには信じられんな」

「そうだな、とはいえ先ほどの魔法は明らかに私達が使つものと異なっているからな」

「・・・魔法じゃと？」

「ええ、私は魔法が使えますから。まあ他の人間には扱えない魔法ですが。」

「・・・危険はないのかの？」

「私は自ら魔法で誰かを傷つけようとは思いません。ただ、私や私の大切な人に害を成そうと言うのであれば、一切の躊躇はありません。徹底的に殲滅します。」

「そ、それは・・・」

「とはいえ、余程の事がない限りは自分から手を出す事はありませんよ。争い事は嫌いですからね。」

「そうか、しかし、どうしたものかのう・・・」

「まあ、私も何故この世界に来たのかさっぱり分かりませんからね。住む場所やら戸籍やらいろいろと面倒そうですね・・・。」

「・・・そうじゃのう」

「なら学園の警備でもしたらどうだ？」

「警備？」

「そうだ、この学園はいろいろと厄介事が絶えないのでな」

「ふゝん、魔法関係ってとこかね？」

「そうだ」

「そうなのか、難儀なもんだねえ」

「どうだ爺、私とコンビを組む事でやらせてみては？」

「ふゝむ、エヴァがそこまで言うのであれば構わんが、お主はどうなのじゃ？」

「そうですねえ、仕事を頂けるなら問題ないですが」

「なら決まりだな」

「おいおい、いいのかい？」

「構わんだろ、私とも互角以上に戦える貴様だ、早々他の奴に遅れを取る事はないだろうさ」

「ほっ?! なんと、エヴァと互角じゃと?」

「ああ、というよりも私も遊ばれた感じだったがな」

「ふゝむ、ならば一応試験を試してみようかの」

「試験・・・ですか?」

「うむ、今日の夜十時に学園の世界樹前広場に来てくれんかの、そこで試験を行うでな」

「はあ、構いませんが」

「おい爺、まさかタカミチとやらせるつもりじゃないだろうな?」

「そうじゃ」

「タカミチって?」

「・・・この学園での警備を担当している、かなりの腕の持ち主だ」

「ふゝん、そっか」

「ふゝんて貴様・・・」

「ま、なんとかなると思うよ」

「・・・随分気楽だな」

「まあね、強者といえる人とは嫌って程にやり合ってるからねえ」

「では、夜十時に試験をし、それに合格すれば警備員として雇おう、その際はわしの方で戸籍も用意するでしょう。」

「よろしいのですか?」

「構わぬよ」

「ありがとうございます、助かります」

「まあ、それも試験に合格したらの話じゃがの」

「試験の合格は、相手を戦闘不能にすればいいので?」

「そうじゃの」

「分かりました」

「おいおい、言い出しておいてなんだがいいのか？」

「大丈夫だよ、多分時間かからず終わるから」

「・・・まあ、貴様がいいなら構わんが」

「それよりも、どこに住んだらいいのかなあ・・・」

「そうじゃのう」

「私のどこに来ればいいだろ」

「・・・いいのかい？　一応俺も男だぞ？」

「か、構わん、成長させてくれた礼だ・・・」

「そつか、ありがとね、エヴァちゃん。という訳で学園長殿、私はエヴァちゃんのところに住む事にしようかと思いますが、いかがでしょうか？」

「ふむ、まあ、エヴァがこうも懐くのも珍しいからの構わんじやろ」

「じゃあ、エヴァちゃんの家にご厄介になりますか」

「か、勘違いするな、あくまで礼のつもりだからな！」

「はいはい、ありがとね、エヴァちゃん（ナデナデ）」

「・・・ううううう」

「茶々丸さんもよろしくお願いしますね」

「はい」

さてはて、こうして何だかよく分からんけど試験を受ける事になった訳で・・・

つーかここつて、もしかすると、ネギま！の世界じゃなからうか。

確かおぼろげに覚えている限りじゃ、麻帆良学園てことを舞台にした漫画だったよなあ。

話の内容とかはもう覚えていないけどさ。

とはいえ、俺が使う魔法の中にも一部ネギま！のがあるしなあ。

テファに掛けた認識障害とか確かそうだったしな。

となれば、またもや面倒事に巻き込まれそうだなあ・・・

ああもつ、どうしてこうなんのかねえ、ほんと。

・・・（夜十時まで経過）・・・

■■■■■■■■■■世界樹広場前■■■■■■■■■■

さて、ここまで何をしてたかといいますとエヴァちゃんの家でいろいろ話を聞いていた。

曰く、ここは魔法使いが設立した学園である事。

教師や生徒の中にも、魔法使いや関係者がいる事。

エヴァちゃんの出自や吸血鬼になった経緯、そして賞金を掛けられた経緯など・・・

思わず涙ぐんでしまいハグしてしまったよ。

なんだってこんないい娘がそんな苦しみを受けねばならんのかっ！

世の理不尽というのは、本当に腹が立つものだ。

俺でよければ、エヴァちゃんの力になると約束しよう・・・

んで、話は変わるがここが試験会場な訳だ。

世界樹とか言ってたが、確かにでかい樹だな、こりゃ。

それに何だかギャラリーも多いねえ。

「ここだ」

「へー随分大きな樹だねえ。それにギャラリーまでいるのか。」

「・・・爺の趣味だろうな」

「なんだい、そりゃ」

「奴はこういった事が好きなのでな。と、来たようだぞ。」

「ホッホッホ、来たようじゃの」

「ああ、学園長殿、時間通り来ましたよ」

「うむ、では早速じゃが皆に紹介するとうかの。皆聞いてくれ、この度学園の警備員として試験を受ける事になった・・・あゝなんじゃったかの？」

「タカシ・シュヴァリエ・ラ・フジサキ・ド・オルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・ド・ラ・ヴァリエールです、長い名前ですから、日本流に『藤崎充』と覚えていただければ結構ですよ。」

「う、うむ、その藤崎充殿じゃ」

「学園長」

「なんじゃね、ガンドルフィーニ君」

「彼の素性は？」

「う、うむ、それなんじゃがの・・・」

「話しても分からんだろうから、時間の無駄だ、爺」

「それに、あの横にいるのはエヴァンジェリンではないのですか？」

「うむ、そうじゃ、彼が成長させたらしい」

「なんて事を！ 君は分かっているのか、その女は魔法界でも指名手配されている極悪人なんだぞ！」

エヴァちゃんが極悪人て・・・

こいつがあれか、エヴァちゃんの言ってた正義バカって奴か。

なるほどな、確かに妄信的な感じだわな。

まるで昔のロマリアの兵隊みたいだな。

いやだいやだ、人の本質も見ようとせずに頭ごなしに批判する奴つてのはさ。

「大体私は元々エヴァンジェリンのような者は信用できないのです！ 私達正義を司る魔法使いと悪の魔法使いが一緒にいるなどと・・・」

・！ それにあの男は素性も分からぬような輩なのです、それを学園の警備員などと！」

エヴァちゃんが悪ねえ・・・

この小僧、頭おかしいんじゃないのか？

きつとあれだな、自分で考えもせず与えられた情報を鵜呑みにしてんだろ。

全く、こういう奴は本当にムカツクわ。

あんまりやりたかないけど、一つお灸を据えてやるか。

エヴァちゃんの為にも、こういった考えを持つ阿呆は放置出来ないからな。

「おい、小僧・・・」

「な、なんd・・・」

・・・ブワッ！

「エヴァちゃんが極悪人だというが、貴様は彼女がどれほどの思いを抱えて生きてきたか分かっているのか？ 誰が好き好んで吸血鬼になどなるものかよ。彼女の苦しみも理解せずに随分ふざけた事を抜かしてくれるな、一度殺してやろうか小僧！」

・・・ゴゴゴゴ！

「な、なんだ、この力は！ お、おい！」

「ま、まま、待ってくれ藤崎殿！」

「黙れ！」

・・・ゴウッ！

「学院長、あらかじめ言っておいたはずだ、俺は俺の大切な人に手を出す輩には一片の躊躇もないと！」

「・・・っ！」

・・・ザッ！

「悪いが一切の容赦はない、生半な事では貴様の愚行、購えぬと思え！」

「ま、待ってくれい、わしからも謝るからここは抑えてくれ、藤崎殿！」

「・・・もういい、貴様の言葉だけで私は十分だ・・・」

「・・・」

「それに私はもう慣れているので・・・。化け物と言われる事にも、蔑まれる事にも・・・」

・・・ブチッ！

あ、やば、完璧に切れたわ。

こんな可愛そうな子に、なんつー顔をさせやがんだっ！

この子が今までどれだけ苦しい思いをしてきたと思ってるんだ！
あゝもう無理、あの小僧ぶっ殺すわ。

「益々許せん、エヴァちゃんにこんな顔をさせおって・・・」

「お、おい・・・」

「徹底的に殺しつくしてやろう。百度殺し、百度生き返らせ、更に
百度殺してやる・・・覚悟しろ小僧！」

「ま、ままま、待ってくれ、藤崎殿！」

「・・・もういい、いいんだ」

「・・・エヴァちゃん」

「お前が私の為に怒ってくれただけで十分だ、ありがとう・・・」

・・・はあ、こんな寂しくて泣いてるような子がこんな顔をするなんて。

どうやらこの世界も、ご他聞に漏れず腐っているようだな。

ほんと、やるせないねえ・・・

俺はエヴァちゃんの味方でいてあげよう。

放っておけないよ、この子。

「・・・分かったよエヴァちゃん。おい小僧、エヴァちゃんに感謝
しろ、エヴァちゃんが止めなければ俺は貴様を確実に殺していたか
らな・・・。それと、他の者も注意することだ、エヴァちゃんに手
を出すような真似をすれば、即刻、滅殺あるのみと思え！ よいな
！！」

「「「「「「は、はいっ！」「」「」」」」」

ふん、本当にあの小僧の言い方は気に食わん。

そりゃエヴァちゃんは口は悪いし昔はいろいろあつたのだろうが、今はこうして悪さもせずにしっかりと生きているんだ。

そりゃ犯した罪ってのはあるだろうから、それは償わなければなら
ないけど、彼女だって好き好んで吸血鬼になつた訳じゃないし、犯
罪とて好んで行つたわけじゃないだろう。

こういう子こそ、大人が救うべきなのになあ。

「・・・ふう、焦つたわい。全くなんちゅー力じゃ、ナギなんぞ問
題にならん力じゃぞ、今の力は・・・。」

「どうだ爺、これだけの力を持つんだぞ、警備員には持って来いだ
ろう。」

「ま、まあ、確かに力だけで言えば問題はないじゃろうな・・・。
とはいえ、一応試験はさせて貰おう。タカミチ君。」

「はい、学園長」

「すまぬが、彼の相手を頼む」

「わ、分かりました」

あれが俺の相手か。

確かにそこそこ出来るようだが、家の奥さん連中ほどじゃないわな。
・

なんせ、本気で怒ったエレンやカトレアは物凄いいからなあ。

思い出すだけでも、震えが来るわ・・・

「君が俺の相手か」

「そうだね・・・」

「まあいい、さっさと始めよう、少々気分が悪いのでな・・・。」

「ええ、いいでしょう」

「では、両者ともよいな・・・始めい！」

ふん、こんな場所いつまでも居たくないんでな、さっさと終わらせて貰う！

『ストップ』！

「な、なんだ、動けない！」

「悪いがさっさと終わらせてもらっ、『ユビキタス・デル・ウィンデ』！」

「なっ?！」

「『さあ、終わりだ』カッター・トルネード』!」「」「」

・・・ガガガガガ×5

「う、うわああああ！」

・・・ドガアアアアアン！

「『ふん、これで終りだな』」「」

・・・シーン

「ま、まさか高畑君がこうも易々と・・・」

「・・・お、お前、何をしたんだ」

「ああ、俺の世界の魔法を使ったんだよ」

「・・・あ、あれが・・・というか、広場が壊滅してるぞ」

「これでも威力落としたよ」

「・・・あ、あれでか?！」

「うん、まあ、本気でやったら彼、確実に死んでるよ」

「・・・デタラメだな」

「まあ、義母上の特訓に比べれば楽だよ」

「お前の母親はどんな化け物だったんだ・・・」

「とりあえず、相手は戦闘不能のようですし合格って事でいいんですよね、学園長殿」

「う、うむ・・・」

「じゃ、エヴァちゃん帰ろうか」

「・・・そ、そうだな」

「ああ、それと再度の忠告ですが、エヴァちゃんや茶々丸さんに手を出したり悪口言ったりしたら、即刻消しにかかりますのでそのつもりで。」

「・・・わ、分かったわい」

「じゃあ、これで失礼しますよ、詳細については後日また・・・」

「う、うむ・・・」

こうして試験は即時終了。

つか、義母上や奥さん達ならストップにも耐えるんだけどねえ。まだまだ甘い証拠だのう。

「なあ」

「ん、どした、エヴァちゃん」

「・・・お前は本当に吸血鬼を恐れないのか？」

「全然、むしろエヴァちゃんは可愛いつてばさ」

「・・・あ、ありがとう」

「どういたしまして。まあ、エヴァちゃんはしっかり守ってあげるから心配しなさんな。」

「・・・っ！ ふ、ふんっ！」

「あらあら、可愛いねえ、お兄さんっ！ 抱きしめたくなくなっちゃうよっ」

「・・・うつうつ」

なんだか、ルイズとエレンに似てる感じがするなあ。

ツンデレなことかさ。

まあ、きっちり守ってあげるとしましょう。

お世話にもなる訳だしね。

しかし、あの小僧みたいなバカが多いとなると、この先面倒だねえ。

どうせ突っかかってくるんだろうしさ。

ま、そんなきゃぶっ飛ばせばいいだろ、遠慮する必要なんぞないわな。

さてはて、今後どうなるのか分からんけど、ま、頑張っていくみますかね。

外伝：恋姫じゃなくネギま！の世界だったら？（後書き）

なんだか、滅茶苦茶っすね。

まあ、あれです、ただのお遊びって事でどうか一つ・・・

今のところ、続きを書くつもりはないですからねえ。

ゼロ魔の方のネタを考え付く為のお遊びと思ってご容赦ください。

では（・・ω・・）ノシ

外伝：続！恋姫じゃなくネギま！の世界だったら？（前書き）

えゝ一発ネタの予定だったんですけど、どうしても続きが読みたいとのメッセー지를いただきましたまして、後編？みたいな感じで書きます。やっぱりネギま！は人気あるんですかねえ。とりあえずどうぞゝ

外伝：続！恋姫じゃなくネギま！の世界だったら？

ちわっす、藤崎充だす。

以前の試験からはや一ヶ月が経ちました。

試験の結果から、戸籍やら身分証明、警備の仕事などを獲得する事が出来ましたよ。

おかげで今はエヴァちゃんや茶々丸さんと、悠々自適に暮らしています。

エヴァちゃんも成長はしたんだけど、いきなり学校やめるのもあれだし卒業するまでは幻術を駆使して通い続ける事になりました。本人は面倒くさがってたけどね。

加えて例の正義バカ共なんです、案の定というかなんとというか随分と俺を敵視してるみたいだ。

先日警備の仕事中なんて、いきなり喧嘩売られたんだよね。

まあ、正当防衛として即効ボコしましたけど。

んでそのまま学園長室に乗り込んで、阿呆からの謝罪と賠償を獲得。おかげで、資金にも余裕が出来ましたわ。

しかし、なんつーのか、この世界の魔法使いとやらは随分と歪んでいるようだ。

なんか、自分達こそが絶対の正義だ〜みたいな感じだし・・・

もうね、アホかとバカかと・・・

どこの世界に絶対の正義なんてものがあんだか。

もうバカばかりすぎて、奴らの話なんぞ聞きたくもないわ。

とまあ、こういった訳で現在エヴァちゃんの自宅で、俺はのんびり暮らしている訳さ。

あ、そうそう、なんだか茶々丸さんの姉である、チャチャゼロにも紹介してもらったよ。

どうもエヴァちゃん魔法が封印されているらしく、自分じゃ動けないらしいんだよね。

成長したんだから、問題ないんじゃないかと思ったけどどうもそうじゃないらしい。

魔力の封印は、所謂呪いに該当するものらしく成長しただけでは解けないという事なんだよ。

んだもんで、俺が解こうかと思ったんだけど、学園長に止められた。なんでも、勝手に解くと問題があるとか・・・

やれやれ、ここでも正義バカの独善行動って訳ですか。

まあ、正義バカ共の持論なんぞ俺には関係ないし、エヴァちゃんが戻ってきたらさくつと解いてしまえようかね。

その方が彼女も喜ぶだろうしさ。

「おい」

「ん、どした、チャチャゼロ」

「ご主人の呪い解けないのか？」

「あゝやつば自分で動きたいか？」

「そりゃな、こうして座りっぱなしじゃつまらねえしな」

「だよなあ、んでも、正義バカ共がねえ」

「ああ、あのうざってー連中か」

「ぶつちやけ、俺の魔法使えば即効解けると思うけどね」

「ならやつちまえばいいじゃねえか」

「うん、俺も今それを考えててさ、だからエヴァちゃん戻ったら話をして解いてあげようと思うわけさ。」

「そうか」

「チャチャゼロもその方がいいだろ？」

「まあな」

「ま、解いたら解いたで正義バカ共が難癖つけて来るのが面倒だけどね」

「ぶっ殺しちまえばいいじゃねえか」

「それこそ面倒だよ」

「ふん、俺なら叩き斬ってやるのによ」

「俺もそうしたいけどねえ」

ほんと、あの連中うざったくしょうがないのよ。

仕事のときもいちいち難癖付けてくるしさ。

我慢にも限度があるんですがねえ。

「はあ、ほんと、バカは死ななきゃ治らないというけど」

「死んでも治らねえだろ、あのバカ共は」

「デスヨネー」

「ま、ご主人戻ってきたら、さっさと解いてやってくれや」

「そうするよ」

この一ヶ月、エヴァちゃんと暮らしてみて分かったけど、あの子は根っこの部分では凄く素直ないい子なんだよな。

ただ、今までが吸血鬼というだけで迫害され、追われてきたせいで性格捻じ曲がっただけなんだよ。

それにさ、この間エヴァちゃんとチャチャゼロと俺とで飲んでたんだけど、エヴァちゃんが酔っ払ってしまったので寝かしつけようとしたらさ、俺の袖掴んで離さないんだよ。

まあ、そんなとき少し泣いてたけどね。

多分、昔を思い出してたんだろうねえ。

あれ見てしまうともうなんというか、滅茶苦茶愛おしく思えてくるよ。

なんか、孫が眠れなくてベッドに潜り込んで来たときと似てるんだ

よねえ。

だもんですから、茶々丸さん呼んで直ぐに録画して貰いました。
もう、永久保存版決定だね！

エヴァちゃんに後で見せたら顔真っ赤にして怒ってたけど、余計に可愛かったからつい抱きしめてしまいました！

・・・ガチャ

「帰ったぞ」

「お帰り、エヴァちゃん、茶々丸さん」

「只今帰りました」

「おう、ご主人、妹よ、お帰り」

「なんだ、また飲んでたのか・・・」

「チャチャゼロの付き合いでね」

「しかたねえだろ、俺にはそれしかする事ねえんだしよ」

「全く、この駄目人形め」

「そういうなら、早く魔力を取り戻してくれよ、ご主人」

「・・・それこそしょうがないだろう、呪いがあるんだからな」

「あゝその呪いだけど、解こうか？」

「爺にも駄目だと言われているのだろう」

「んなの、あいつらの都合じゃないか、知った事じゃないよ」

「しかしだな・・・その、お前にも迷惑が」

「子供がそんな事気にするんじゃないの」

「・・・いい加減その子ども扱いをやめてくれ」

「そりゃ無理だね」

「即答するなっ！」

「だってエヴァちゃん可愛いしねえ、寝てる時なんか特にさっ」
「うっうっ、あの事は言うなあああ！」

「ははは、そうやって怒るのがまた可愛いんだよね」

「いい性格してんな、お前もよ」

「まあね」

「褒めてねえよ」

「んじゃ、ぱぱつと解くかね、『ライブラ』！」

・・・キュイイーン！

「お、おい、何を！」

「はいはい、静かにしてましようね」

ふむ、呪いの情報はと・・・
は？

なんだこりや、滅茶苦茶力技じゃねえか。

術式とか滅茶苦茶だぞこれ・・・

これ掛けた奴、バカだろ・・・

とはいえ、この程度ならシヤナク使えば解けるな。

んじゃ、いっちょやりますか。

「ふむ、呪いの解析終了つと。つか、これ掛けた奴ってバカなんだね、術式が滅茶苦茶だったぞ・・・。」

「・・・まあ、バカなのは否定せんな」

「ああ、確かにあいつはバカだ」

「やつぱりか、ま、いいや、んじゃ解くよ」『シヤナク』！」

・・・カツ！

・・・パキイイン！

「うう・・・」

「どうだい？」

「・・・ち、力が戻り始めてる」

「俺の方もだぜ！」

「ほ、本当に呪いが解けた！」

「うん、どうやら問題ないみたいだね」

「はは、本当にデタラメだな、お前は・・・」

「そうかね？」

「しかし、礼を言う、これで漸くうつとうしい呪いから開放された」

「俺もやつと好きに動けるぜ」

「どういたしまして」

いやはや、よかったよかった。

まあ、呪い解いたところで今のエヴァちゃんが悪さをする事はないからねえ。

もしそうなたとしても、俺が止めればいいだけだし。

後で学園長にも報告しとくか。

どうせ正義バカ共が難癖付けて来るだろうけどな。

「さてと、んじゃ今日の仕事までのんびりしてますかね」

「そうだな」

「おい、景気づけにもう一杯やろうぜ」

「お、いいね」

「お前らまだ飲むつもりか・・・」

「いいじゃねえか、ご主人の呪いが解けた祝いだぜ」

「そういう事、茶々丸さんも一緒にどうだい」

「い、いえ、私は食物などには必要ありませんので」

「あれ、でも前に紅茶飲んでなかった？」

「あれはフェイクでして・・・」

「あゝそうなのか、まあ、フェイクでも飲めるなら一緒に楽しもうよ」

「そうだぞ、妹よ」

「は、はあ、では・・・」

「うつし、では、エヴァちゃんの呪い解放を記念して、乾杯だ！」

「おうよ！」

「全く・・・」

こうして、仕事の時間までまた飲み続けてた訳でして。

チャチャゼロはかなりいける口なんだけど、エヴァちゃんは飲みすぎると幼児化するんだよね。

なんつーかそのときの仕草が孫にそっくりなもんで、めっちゃ可愛いんですよ。

もうあれだね、エヴァちゃんは嫁には出しません！

近づく野郎がいたら・・・フヒヒ・・・

・・・（数時間経過）・・・

■■■■■■■■学園郊外■■■■■■■■

「今日は俺は一人で担当かな」

「いえ、私が一緒だよ」

「ん？」

えゝと、誰だっけ、この娘？

確か警備員の中に居た気がするけど、名前思い出せないな。

「えーと、どちらさんだっけかね」

「龍宮真名だよ」

「あーそうだったね」

「貴方の噂は聞いているよ」

「どんな噂？」

「なんでも、極悪人に組する更なる極悪人だとさ」

「ふーん、そうかい、ま、どうでもいいけどね」

「気にならないのかい？」

「全く。つか、どうせ正義バカ共が流した噂だろしさ。」

「貴方はマギステル・マギではないのかい？」

「冗談よしてくれ、俺をあんな阿呆な連中と一緒にしないで欲しい。それこそ不名誉極まりないよ。」

「そ、そこまで言うのかい・・・」

「だってさ、あいつらただのバカでしょ」

「・・・ず、随分辛辣だね」

「ああいった連中つてのは、自分の考えを持たずに与えられた正義を妄信するからね。そのうえその正義を掲げて従わない者は力で踏み潰す。ぶっちゃけ、中世のキリスト教みたいなもんさ。性質悪いっただけやしなないよ。」

「そうかい」

「ま、正直な話をすれば、俺としてはあんな連中やこの学園はどうでもいいがね」

「ならなんで警備なんてやってるんだい」

「勿論エヴァちゃんがいるからだよ」

「随分とエヴァンジェリンに御執心のようだね」

「可愛いからね、つつい甘やかしてしまうんだよねえ」

「可愛いって・・・」

「まあ、君も下らん言葉に踊らされずに、物事の本質を見極める事だね。これは年長者としての助言だよ。」

「・・・ありがたく受け取っておくよ」

「そうしてくれると嬉しいね、そんじゃお仕事始めますかね」

「ああ」

さてはて、やっぱりと言うかなんと言うか、正義バカ共が妙な噂を流してるみたいだねえ。

まあ、どうでもいいけどさ。

とはいえ、そのせいでエヴァちゃん達に危害が及ぶような事があつては不味いからな。

俺も注意しておかないと・・・

・・・（警備任務終了）・・・

ふう、今夜も終わりか。

つつても、今夜は特に何も無かったな。

まあ、途中で転んで怪我してる生徒がいたので治療だけはしておいたがね。

しかし、こう毎夜毎夜ドンパチやらなきやならんとは、この学園もまともじゃなさそうだな。

さうてとつと、早く帰ってエヴァちゃんをからかって遊ぶとしますかね。

「龍宮」

「ん、刹那か、どうした」

「今日のお前の担当は」

「ああ、彼と同じだったよ」

「危険はなかったのか？」

「いや、危険どころかこちらを気遣った動きをしていた」

「・・・怪しいな」

「やめておけ、彼は確実に強い、私達では到底太刀打ち出来る相手じゃない」

「・・・しかし、もしもお嬢様に何かあれば」

「恐らくそれはないだろうな」

「なぜそう言いきれる？」

「彼にとって価値があるのは、エヴァンジェリン達だけだからだ。他の事は雑事に過ぎないんだろう。」

「その通り、よく分かってるね、真名ちゃん」

「・・・っ！」

「い、いたのかい」

「ありゃ、気が付かなかったかね？」

「ああ」

「別段気配消してたつもりもなかったんだがね」

「丁度いい、貴方に聞きたい事がある」

「おいおい、お嬢さん、人に物を尋ねるなら自分から名乗りなさい、それが礼儀というものでしょうに。」

「うるさいっ！ いいから質問に答えろっ！」

「はいはい、で、何を聞きたいのかな、お嬢ちゃん」

「・・・っ！ 貴様はお嬢様に仇成す者ではないのか」

「ちよいまち、お嬢様って誰だ？」

「近衛木乃香さ」

「近衛って言うと、学園長の血縁者かい？」

「孫だね」

「へーそうなんだ」

「どうなんだっ！」

「落ち着きなさいって。そもそも俺がなんでその娘に危害を加えにやならんのだ？」

「なんせあの学園長の孫だからな、狙う者も多い」

「ふーん、はつきり言えば全く興味ないね」

「・・・その言葉に嘘はないな」

「嘘言ってどうなるのさ」

「・・・ならばいいだろう、正し、お嬢様に何か危害を加えれば！」

「・・・はあ、君ねえ、俺との力量差分かってんのかい？ そういう言葉を吐くならせめてあの高畑とかいう坊やを倒せる位の実力付けてから言いなさい。」

「何だと?!」

「やめろ、刹那。彼の言ってる事は本当だ、我々では束になっても勝てん。」

「真名ちゃんをよく分かってるね」

「私は貴方を相手にはしたくないからな・・・」

「それが懸命だよ、んじゃ、俺は学園長に報告する事があるんでね、先に戻らせて貰うよ。」

「ま、待て！」

全く、どうしてこう近視眼的なのが多いの・・・
はあ、ほんと疲れるわ。
相手してらんねえな。

と、その前にあれだ、学園長に報告せにやいかな。
ああ、めんどくさいなあ。
とはいえ、エヴァちゃんの為だししょうがないか。
んじゃ、ちやちやつと向かいますかね。

「じゃあね、『ルーラ』！」

・・・シュン！

「くっ！」

「やめておけ刹那」

「どうして止めた、あんな男なぞ！」

「お前はあの時の戦闘を見ていないから知らぬだろうが、彼は本当に一瞬で高畑先生を倒したんだ。正直、あれほど死を間近で実感した事は無かった・・・。」

「・・・それほどなのか？」

「ああ、少なくとも未だ実力の半分も出していないだろう」

「・・・」

「正直、彼とやりあう事になったら、この学園は間違いなく消滅するだろうな・・・」

「それほど力を持ちながらぜ・・・」

「彼に言わせれば、マギステル・マギと同一視されるのは不名誉だそうだ」

「そんな・・・」

「まあ、彼には喧嘩を売らない事だ、死にたくなければな」
「・・・」

・
・
・

■ ■ ■ ■ ■ 学園長室 ■ ■ ■ ■ ■

・・・コンコン

「学園長、藤崎ですがよろしいですか？」
「開いておるぞ」

・・・ガチャ

「失礼します」

「どうしたのじゃね、こんな夜更けに」

「ええ、報告する事がありましたね」

「なんじゃな？」

「エヴァちゃんの呪い、解きましたから」

「な、なんじゃと！」

「・・・そう怒鳴らないで下さい、近所迷惑ですよ」

「な、なんという事をしてくれたんじゃ・・・本国にどう説明すれば」

「別段構わんでしょよう」

「そんな訳があるかつ！ あれは本国では最重要の犯罪者なのじゃぞ！」

「それは貴方方の都合でしょよう、彼女や私には関係ありませんから」

「・・・ほ、本気で言つとるのか」

「ええ、それが何か？」

「・・・分かつとるのか、君は下手をすれば本国と敵対する事になるのじゃぞ」

「そんな事で敵対しようというなら、別に構いませんよ」

「き、君はっ！」

「エヴァちゃんからも聞きましたけど、彼女の呪いは本来は三年で解かれるはずだったらしいじゃないですか。それが掛けた本人がどこぞで生死不明になった為に、十五年もの間縛り付けられていると。その後も解かれるような事はなく、延々と同じ日常を繰り返す毎日・・・。例え誰かと知り合っても三年で自分の事を忘れていく・・・。これがどれほど辛い事が、貴方方は考えた事があるんですか？」

「・・・む、むう」

「どうせ犯罪者だから構わないとか思ってたんでしょ、全く、これだから正義バカは嫌になるんですよ。いいですか、彼女は吸血鬼になり不死者となったとはいえ、感情を持って生きているんです。それを貴方方の勝手な理論で縛り付けていい訳がない。もしこれ以上彼女を苦しめようとするなら、私はこの学園潰しますからね。では、話はそれだけです、失礼しますよ。」

「ま、待ってくれ」

・・・ボタンッ！

たく、トップがあればこの組織も程度が知れてるな。
あゝ胸糞悪いったらありやしねえ。
さっさとエヴァちゃん分を補給せねばな。

■■■■■エヴァンジェリン自宅■■■■■

「ただいま」

「おう、お帰り」

「ああ、帰ったのか、随分遅かったな」

「学園長のところに報告してきたんでね」

「そうか、大丈夫だったのか？」

「まあ、なんか言われたけど、きっちり言い返してきたから。つか、ぶっちゃけ喧嘩売ったかもねえ」

「おいおい・・・」

「お、いいな、殺し合いか？」

「そこまでは発展してないよ、ただ、エヴァちゃん達に手出すならこの学園消滅させるって断言してきただけだよ」

「おい！ 笑顔で言う事かっ！」

「だって、俺からすればエヴァちゃん達のが大事だしさ」

「そんなときや俺も混ぜろよ、最近切つてねえからな」

「ま、学園長もバカじゃないだろうし、本気で喧嘩売って来る事はないんじゃない？」

「それはそうだろうが・・・」

「ま、場合によつては召喚獣全部出して暴れさせればいいしね」

「召喚獣だと？」

「あ、そういや見せた事無かつたっけ？」

「ないな、というよりもお前の力はほとんど見てないぞ」

「あゝそうだったけね」

そういや、能力的な事ってほとんど説明してなかったな。
警備の任務でも、エクスカリバー使つてれば余裕だからな。
んじゃ、いい機会だし見せところかな。

「んじやさ、魔法球の中で見せようか」

「そうだな」

「面白そうじゃねえか、俺とも戦えよ」

「んじや、一戦やつてみるか、チャチャゼロ？」

「おう、久々に面白そうな殺し合いが出来そうだぜ」

「殺すのは勘弁してくれよ、んじや行きますかね」

「ああ」

・・・

■■■■■魔法球内部■■■■■

「いやしつかし、何時来ても凄いやねここは」

「そうだろう、まあ、自慢の一品だからな」

「これでエヴァちゃんが水着にでもなってくればねえ、お兄さん嬉しいんだけど。」

「・・・ば、バ力を言うな！ 恥かしいだろ・・・」

「ああ、もう、照れてるエヴァちゃん可愛いぞ、こんちくしょう！」

「・・・や、やめろ?!」

「おいおい、じゃれ合つてないで早く見せてくれよ」

「おっと、そうだったな。んじゃまあ、あれだ、竜でいいかね？」

「・・・竜を使役しているのか？」

「まね」

「じゃあ、それでいい」

「ほいさ、んじゃ召喚するよ『出てこい、バハムート改』！」

・・・グオオオオオオオ!

「なっ?!」

「うおっ?!」

「あ、あれは?!」

「よ、久しぶりだな」

「グオオオン」

「え、何、出してくれないから忘れられたと思っただって? 悪かったから、そう勘ねないでくれよ。」

「・・・は、話せるのかよ」

「ああ、俺しか分からないけどね」

「・・・こ、この竜、魔法世界にいる樹龍と同等かそれ以上だぞ」

「なんだいそりゃ」

「魔法世界にいる古代竜の一種だ」

「へ〜つつてもこの上もいるけど？」

「は?!」

「なんなら呼んでみる？」

「お、面白そうじゃねえか、なあ、ご主人・・・」

「う、うむ・・・」

「それじゃ呼びますかね・・・『出てこい、バハムート烈』!」

・・・ガアアアアアア!

「ヒッ!」

「な、なんだありゃ!」

「・・・測定不能です」

「よう、こつちも久しぶりだな」

「ガアアア!」

「んな事言つても、お前の力解放したらやばいんだから我慢してくれよ。まあ、呼びただけなら今度からは定期的にするからさ、勘弁してくれ。」

「ガア!」

「グオ!」

「ああ、紹介しとくよ、この三人は俺が世話になってエヴァンジェリン、チャチャゼロ、茶々丸だ。間違つても喧嘩するなよ? それと、この三人に何かあつたら守ってやってくれな。」

「ガアアアア!」

「グオオオオ!」

「ありがとよ、二人とも。て、どうしたの三人とも、んな呆けちゃつて。」

「な、なななな、なんだあれは！ 最早古代竜どころではないではないか、あの威容、すでに神獣クラスではないかつ！」

「あはははゝそうだろうね、なんせ龍族の王様だからねえ」

「・・・デタラメだと思っていたがここまでだったとは」

「ちなみに、烈が本気でしたら、大陸消えるよ」

「笑っていう事かつ！」

「ま、こんな訳でさ、俺には味方が多い訳さ。だから、エヴァちゃん達は俺がきっちり守ってあげるから、心配しないでね。」

「・・・っ！ ふ、ふん、自分の身くらい自分で守れるっ！」

「女の子が喧嘩なんかしちやだめだよ、傷ついたらお嫁に行けなくなるでしょうに。ま、嫁に出すつもりはないけどね、近づく野郎は問答無用で成敗するけどさ。」

「お、お前は私の親かつ！」

「うん、保護者だね！」

「うつうつ・・・」

「ああ、もう、ほんとエヴァちゃん可愛いなあ」

「・・・だきっ！」

「だ、だから、抱きつくのをやめると言うのに！」

「いいじゃないか、減るもんじゃなし♪」

「・・・も、もう・・・」

「つかよ、あんなん呼び出してお前はなんともないのか？」

「全然平気だぞ」

「なんつーデタラメな奴だよ、お前は・・・」

「酷いっ！ チャチャゼロにまでデタラメって言われたあ、茶々丸さっくん！」

「あらあら、よしよし、だめですよ姉さん、タカシさんを苛めちゃ」
「苛めてねっつの！」

「ははは、まあ、冗談冗談、デタラメなのは自分でも分かってるからね」

「たく・・・」

「ま、こいつらも居る事だし、問題はないよ。油断するつもりもないしね。」

「まあ、これに喧嘩を売るバカは本当の意味でのバカだな・・・」

「流石に俺もこいつらとやる気はしねえよ・・・」

「だろうね」

まあ、烈に喧嘩売る阿呆はいないだろうねえ。

なんせ、こいつが本気出すとマジで大陸程度なら吹っ飛ぶからなあ。つか、これ以上にやばいのもいるしね。

エヴァちゃん達になんかしてきたら、マジでこいつらけしかけてやるう。

ぶっっちゃけ、この学園どうなっても俺は困らないしな。

「しかし、これを魔法世界の連中が見たら腰抜かすだろうな」

「死人出るんじゃないかねえか？」

「そんなかねえ」

「正直、こいつらだけで魔法世界と渡り合えるぞ」

「そりゃそうだろうね、なんせこいつらの攻撃、核以上の威力だか

らね」

「・・・最早言う言葉が見つからん」

「だから、大丈夫さ、エヴァちゃん達に手出しはさせないさ」

「・・・ありがとう」

「もう、そうやってすぐにツンデレするエヴァちゃんが最高に可愛
いぞ、こんちくちよう!」

・・・だきっ!

「だ〜か〜ら〜抱きつくなと言ってるだろうがっ!」

「よいではないか〜」

「やれやれだぜ・・・」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに」

ま、これから先どうなるか分からんけど、きっちりこの子達を守つてあげないとな。

たとえ世界中が敵だとしても、俺一人くらい味方でいてあげなきゃ。だってこの子達も犠牲者だからね。

いくら吸血鬼だろうと、幸せになる権利は等しくあるはずなんだ。それを下らん正義の為に犠牲になどさせてたまるかよ。

来るなら何時でも来てみる、徹底的にやってやるさ。

この世界での大事な人である、この三人をきっちり守ってみせるさ。

外伝：続！恋姫じゃなくネギま！の世界だったら？（後書き）

つーわけで書いてみました。

なんですけど、思いの外長文になってしまった（；・・・A・`）
まあ、ネギま！はどうしても、あの正義バカが作者は気に入らない
のですよ。

なもんで、ほぼ敵対する道を選んでいます。

ぶっちゃけ、烈のエクサフレア連発すれば魔法世界壊滅出来ますか
らねえ。

とはいえ、自分から喧嘩売りには行きませんけど。

基本買いですからねw

まあ、今後この話を本気で書くとするならば、しつかり構想練って
設定作ってから書きたいと思いますよ。

とはいえ、ゼロ魔もあるし恋姫もあるので難しいんですけどね・・・
他にリリカルな世界とか聖杯戦争世界とか結構リクエストをいただ
いているので、何れはそっちも外伝で書いてみたいな〜と思います。
まあ、リリカルな世界だと、どうあっても恋愛に発展する事はなさ
そうですが・・・

つか、まさかのプレシアがヒロイン決定！

なんて事になりかねませんわなwwww

では、今回はこの辺で〜再見！

外伝：リリカルな世界だったら！前編（前書き）

今回は以前リクエストされたリリカルな世界です。
ヒロインはなんと、予想の斜め上でプレシアです！
人妻万歳！

外伝：リリカルな世界だったら！前編

……ドスンッ！

「……………う、うう」

こ、ここは……

私は確か、ハルケギニアで老衰により死を迎えたはず……
なのにまた、あの『扉』の前に……

「こ、ここは一体どこなんだ？」

「……………お兄ちゃん、だあれ？」

「ん？」

声がしたので振り返ってみるが……誰もいない。
おかしいな、確実に声がしたんだが……
耳までおかしくなったのか？

「お、おい、誰かいるのか？」

「ここだよ、ここ！」

「ここって……」

声のする方向を見ると……
なんだありゃ、でっかいガラス管に少女が入ってる。
どうなってんだこりゃ……

「お、お嬢ちゃんが話してるのかい？」

「そうだよ、でも私の声が聞こえる人なんて初めて！」

「……どういう事だ？」
「だって私死んでるから」

……

……

うおい！

そんな楽しそうに言う事が！

死者の声が聞こえるなんてどういう事だ？！

やっぱりあれか、一度死んだからか？

にしては体のどこにも異常はないようだな。

それに、なんとはいえいいのか生命力に溢れているというか……

鏡でもあれば確認出来るんだが……

「そこにいるのは誰！」

「ん？」

「……一体どこから入ったのかしら？」

「あ、いや、私は……」

「まあ、いいわ、消えなさい！」

「ちょー！」

ま、不味い！

後ろのお嬢ちゃんに当たってしまっ！

仕方ない、防御魔法広域展開！

……バリバリバリッ！

……ガガガガガガッ！

.....ドガアアアアアン！

「ふん.....」

.....パラ

.....パラ

.....パラ

「あ、危なかった.....。おい、後ろのお嬢ちゃんに当たったらどうするつもりだ！」

「！！！」

そんな、いくら衰えたとはいえ私の魔法を.....

それに今魔法の発動の気配はなかったはず。

この男一体何者.....

「不法侵入したのは悪いと思うが、少しは話を聞いてくれてもいいだろう！」

.....どうにも掴めないわね、この男。

服装にしたって、ミッドの物じゃないのは確実.....

それに.....ううっ！

「うほっうほっー」

……ビシャッ！

「お、おい！ しっかりしろ！」

「触らないで！」

んな場合じゃないだろうが！

その吐血量だと、下手するとすぐにでも死ぬぞ！

「……ママ」

「マ、ママ？ お嬢ちゃんのママなのかい、この人？」

「うん、そうだよ……」

「貴方、一体誰と話しているのよ……」

「誰って、後ろのお嬢ちゃんだが……」

「……は？」

「そついや、お嬢ちゃんお名前は？」

「ありしあ・てすたるっさ、五歳だよ！」

「そうかそうか、アリシアちゃんか、可愛い名前だな。と、和んでる暇はないな、どちらよつと診せてみる……。ふむ、診たところ内臓系の病気のようなな、とりあえず応急処置だ、『リジエネ』！」

パアアアアア！

「……い、痛みが少し引いたわ」

「これで時間をおけば体力も回復するだろう。とはいえ病気が治る訳ではないがな。さて、落ち着いたところでお互いの事を知る為に

「その前に出来ればミセス、貴女のお名前を教えてくださいいただきたいのだが。ああ、申し遅れたが、私はタカシ・シュヴァリエ・ラ・フジサキ・ド・オルニエール・ル・ブラン・ラ・ライクス・ド・ラ・ヴァリエールと申す者。以後お見知りおきを。」

「……随分長い名前ね」

「まあ、一応は貴族制度に則った名前なのだがな」

「……貴族制度？」

「後ほど詳しく説明する」

「いいでしょ、私はプレシア・テストロッサ。あのカプセルに入っていた、アリシアの母親よ。」

「そうか、よろしくミセス・テストロッサ」

どうも事情が深そうだな。

何よりもこのミセス・テストロッサだが、覇気というか生きる気力が感じられない。

恐らく娘が死亡したショックだろうが……

それに、眼に宿る光、あれは狂気の光だ。

このままでは、何れとんでもない問題を起こしかねんな。

「で、貴方は一体何者なのかしら？」

「何者といわれてもな……。正直自分でもどうなってここに来たのか分らんのだ。実際私は家族に看取られて死んだはずなんだから。」

「……ふざけているのかしら？」

「ふざけてなどおらぬよ、実際、息子や娘達、それに大勢の孫に看

取られて死んだのは事実だ。それが気が付いたらあの場所にいたのだ。」

「あり得ないでしょう、そんな事」

「私もそう思うがね。とはいえ、事実なのだから仕方あるまい。」

その後も引き続き話し合いは続いた。

まあ、私の事はハルケギニアの事なども含め話したところ、一応は納得してくれたようだ。

半信半疑だろうが。

次いで肝心の彼女の事だが、ある必要な物を手に入れる為に『地球』へもう一人の娘と呼べる存在を送り込んだらしい。

その娘ももう少しすれば戻って来るらしいのだが……………

どうもおかしい、その娘の事を話すときなんというか憎い者でも見るような眼をするのがどうしても気にかかる。

何かあったのか？

……………それにしても地球があるって事は、日本もあるんだろうな。

懐かしいな……………あの日本の風景は。

まあ、現実世界ではないだろうとは思うが……………何せ現実世界に魔法なんぞ存在するはずもないし。

とはいえ、一度は戻ってみたいものだな。

さてと、それではそろそろ肝心の事を聞くとしますかね。

「でだ、ミセス・テストロッサ、あのアリシアちゃんの事だが」

「……………貴方は話をしていたのよね」

「ああ、あの娘から話しかけて来た。話せる理由としては一度死亡しているからだろうとは思うが、詳細は分らん。」

「……そう」

「それとこんな事を言うのはあれだが、ミセスの体の状態からすると恐らくそう長くはあるまい。どうも体中が病魔に蝕まれているようだからな。」

「そうね、私はもう長くはないわ」

「ならば何故そのような狂気の光を眼に宿しているのだ」

「……」

「あ、いや、すまん、立ち入った事であつたな。聞かなかつた事にしてくれ。」

「……アリシアを、蘇生したいのよ」

「死者の蘇生だと？」

「……そうよ」

「普通に考えれば無理であろう」

「……可能性はあるのよ、『失われた都・アルハザード』に」

「ふむ……」

死者の蘇生か……よくある与太話だな。

実際死者の蘇生はそう簡単に出来るものではない。

一度死んだ人間の魂を現世に戻し体に定着させるのは、並大抵の力じゃ不可能だ。

昔一度だけ『フェニックス』を喚び出し話をしてみたが、どうやらフェニックスの力は召喚獣の中でも取り分け特殊なようだ。

ゲームじゃ結構ポンポン使えるが、あんな感じで魂を現世に戻しかつていると世界のバランスが崩壊してしまうらしい。

なので、もしフェニックスの力を使い魂を現世に喚び出すには、長い時間をあける必要があるとの事だ。

とは言つても私は今までフェニックスの力で魂を現世に喚び出し誰かを生き返らせるような事は一度もしていないから、アリシアちゃ

んを蘇生は可能だろう。

それにアリシアちゃんも、たった五歳だからな。

出来る事ならもつというんな経験をさせてやりたいと思う。

しかし、うゝむ……悩むところではあるな。

「なあ、ミス・テストロッサ」

「何かしら？」

「貴女の病気の治療とアリシアちゃんの蘇生が出来ると言ったら？」

「……で、出来るの？」

「私ならば可能だ」

「お、お願い！ 私の事はいい、アリシアだけでも！」

「お、落ち着け！」

「お願いよお……！」

これは相当に参っているようだな。

まあ、一人娘を亡くせば無理もないか。

私も娘が病気になったときは、大慌てになったものだしな。

「蘇生は出来るが、それには条件がある」

「何？！ 何でも言つて！ 私に出来る事なら！！」

「もう一人の娘の事だ」

「……フェイトの事？」

「そうだ、貴女がそのフェイトちゃんの事を話すとき、どうも目の光が気になってな。よければ話してはくれまいか？」

「……」

そうして、プレシアが重い口を開いたのだが……どうやら彼女はアリシアの代わりとしてフェイトちゃんを作り出したようだ。

だが生まれたフェイトちゃんは、見た目はアリシアちゃんに似ていても全く異なる人間だった。

そのため、彼女に辛くあたってしまったらしい……
全く、そんな事当たり前だろうに。

日々の生活や経験などにより人格は構成されるんだ、例え同じ記憶
を持っても同じ人間になどならん。

やれやれ、狂気に囚われるあまり、そんな事も判断出来なくなつて
いた訳か……

仕方ない、ここはフェイトちゃんの為にもプレシアの為にも少し説
教するとうかが。

「はあ、あんなミス・テストロッサ」

「……何」

「同じ記憶を持っていたても、同じ人間なんぞ作れるはずもないだろ
う」

「……」

「人間は日々を生きる事で人格を構成するんだ、周囲の環境が違え
ば違う人間になるのは当然だ」

「……わかつてる、でも、私は……」

「それに、フェイトちゃんも貴女の血を持って作られたのだろう？
ならば貴女の娘だ」

「……」

「大体、フェイトちゃんを否定する事はアリシアちゃんを否定する
事だぞ、言ってみれば二人は姉妹なんだからな」

「……そう、だけど」

やれやれ、どうしてわからんのだ。

どちらもプレシアの血を分けた娘だろうに。

全く、嬢が深いと大変だ。

「全く、お前は親だろうが！ 親ならば、生まれた子がどんな存在であれ愛するのが親の務めだ！ 違うか、プレシア・テストロッサ……！」

「……！」

「貴女とて本気で憎んでいる訳ではないだろう、自分の血を分けた娘を」

「……でも、今更どうやってあの子に」

「遅くなどないさ、向き合えばいい、自らの本心でな」

「……そう、ね、そうよね、あの子は私のもう一人の娘だものね」

「そうだ、必ずフェイトちゃんも貴女の愛情を受け入れてくれる」

「わかったわ、フェイトが戻ったらあの子に今までの事を全部謝るわ、それとこれからは大事に育てるわ、私のもう一人の娘を……」

「そうか、わかってくれて何よりだ。では約束どおり貴女の治療とアリシアちゃんの蘇生を行おう。」

「本当に出来るの？」

「ふ、男に二言はないさ、任せておけ」

さてと、まずはプレシアの治療からだな。

今の状態では、長くても数ヶ月しか生きられまい。

せっかくアリシアちゃんが蘇生しても親のプレシアが死んでは意味がないからな。

では、アクスレピオスの杖を使って病を癒すでしょう。

と、その前に少々約束して貰わなければな。

「それとだな、ミス・テストロッサ」

「何？」

「これから行つ全ては秘密にして欲しい」

「……どういう事？」

「何せ死者の蘇生や万病を治す行為だ、外部に知られれば面倒だろう」

「そ、そうね、確かに管理局に知られると面倒ね。わかったわ、秘密にすると誓つ。」

管理局？

はて、どっかで聞いたような……

うゝん、とてつもなく関わってはいけないような、白い魔王が追ってくるようなそんな感じがするのだが……

「すまない、その前に少し聞きたいのだが、今の話にあつた管理局とは？」

「ああ、貴方は知らないわよね。正しくは『時空管理局』、多くの次元を管理している組織よ。まあ、言ってみれば警察のようなものね。」

「ふむ」

「ただ、彼らは自分達に従わない者にはかなり強硬な態度を取るわ」
「随分と物騒だな」

「……ええ、過去には従わない世界を武力制圧した事もあるわ」

「なんだそれは、ほとんど侵略ではないか？！」

「彼らにとっては、自分達こそが絶対的正義なのよ」

「……それは私の一番嫌いなタイプだな」

昔のロマリアと同じだな。

あそこも聖エイジス32世の時代は酷かったからな。

何度私やルイズ、テファにちよっかい掛けてきた事か……

まあ、最終的にはジョゼフと協力して聖エイジス32世は潰したが、その後はマザリー二枢機卿が教皇となり、大分改善されたがね。

「全く、どうしてこうどこの世界にもそついう馬鹿共がいるのか」

「……貴方の世界にも？」

「まあな、あまりにも傲慢が過ぎたのでね、盟友と共に徹底的に潰したがね」

「……貴方も随分物騒ね」

「私の妻にちよっかいを掛けたからな、許す理由など微塵もないさ」
「そう」

「まあ、私の世界の事は後々話そう。では早速だが始めるとしよう、どこか広い場所がいいのだが……」

「なら、中庭にしましょう、あそこなら十分な広さがあるわ」

「分かった、それとアリシアちゃんを外に出してくれるか、あの中
で蘇生したら溺れてしまうからな」

「そ、そうね」

そこまで頭回ってなかったな……

全く、娘が大事なのは分かるが、よく考えて行動しろというのに。
この人はどうやら、本当にアリシアちゃんの事しか考えてないんだ
な。

やれやれ……

……

……

■ ■ ■ ■ ■ 時の庭園：中庭 ■ ■ ■ ■ ■

「さあ、ここならいいでしょ」

「ああ、十分だ。それとアリシアちゃんの蘇生前に貴女の病を癒す。」

「どうやるのかしら？」

ゲート・オブ・バビロン

「こうするんだ、王の財宝！」

さてと、プレシアは驚いているが説明は後にしてアクスレピオスの杖はっと……あったあった。

こいつを使うのは久しぶりだが、まあ、大丈夫だろう。

「では先に診察を行う、『ライブラ』！」

キイイン……

ふむ、病気としては結核のようだな。

後は無理な魔法の行使で、体組織がダメージを受けているようだな。ならば、結核は杖で治し、体組織の方は『アレイズ』を使うとするか。

「ふむ、病気としては結核だな。後は体組織がダメージを受けている。こちらの方が症状は酷いようだ。」

「治るのかしら？」

「無論治せる。それぞれ治療法は違うがね。」

「そう、お任せするわ」

「任せよう、では、始める、『医神アスクレピオスの杖よ！この者の病、癒したまえ！！』」

パアアアア……

ふむ、成功だな。

相変わらず凄い杖だ。

どんな病気でも治してしまうのだからな。

「い、今ので治ったのかしら？」

「ああ、胸の苦しさは無くなっているだろう？」

「そ、そういえばそうね……」

「後は体組織に対する治療として……『アレイズ』！」

カッ！

「い、今のは？！」

「何、肉体を再生させる魔法だ。体組織のダメージもこれで消えるだろう。」

「……す、凄いわね」

「何、次を見たらもっと驚くさ。では、アリシアちゃんの蘇生を開始しよう。」

さてと、始めるとするか。

フェニックスを喚び出すのは随分久しぶりだからな。

なにせあいつはかなり派手だからな、目立ちすぎるんだ。

ま、そんな事はおいとして、早々に蘇生するとうかね。

「ではいくぞ……。さあ、我が元に顕現せよ！ 命を司る不死なる
炎の鳥よ！ 来い！ 『フェニックス』！」

……ボウッ！

「ケエエエエ！」

「な？！」

「久しぶりだな、フェニックス」

「コク」

「すまないが、そこにいる娘の蘇生、頼めるか」

「コク」

「分かってるさ。蘇生するのはこれっきりだ。」

「コク」

「ではいくぞ！ フェニックス、『転生の炎』！」

……カッ！

……ボウウウウ！

「ア、アリシア！」

「大丈夫だ、あの炎は焼く為のものじゃないから」

「で、でも！」

「いいから、黙ってみていろ」

ふむ、どうやら順調のようだな。

まあ、アリシアちゃんの場合魂自体はここにいる訳だし後は定着させればいいだけだな。

診たところ、肉体的な外傷はないしフェニックスも問題ないって言うてる。

これなら滞りなく蘇生出来るな。

…… シュウウウウウ

お、炎が消えたか。

という事は、蘇生が完了したようだな。
一応確認してみるか。

「フェニックス、蘇生は終わったか？」

「コク」

「念の為診察してみよう……ふむ、脈も安定しているし呼吸も……大丈夫だな。どうやら問題ないようだな。」

「……ほ、本当にアリシアは」

「ああ、蘇生出来ている。眼が覚めるまで少し時間があるだろう。出来ればどこかに寝かせたいのだが……」

「あ、そ、そうね、私の部屋のベッドに休ませるわ」

「では運ぶとしようか」

「スースー」

「……ああ、アリシア、なんて可愛いのかしら」

「ほらほら、娘を愛するのは後にして早く運ばう。おっとそうだった、助かったよフェニックス。」

「コク」

「もしかしたら、また喚び出すよびだすかもしれんが、その時は頼むな」
「コク」

…… シュウウウウウ

「……き、消えた?!」

「幻獣界に戻ったんだよ、さ、早くアリシアちゃんを寝かせよう」
「え、ええ……」

ふう、どうやら蘇生後の状態も安定しているようでよかったな。
しかし、随分と可愛い寝顔だな。

これじゃミセス・テストロッサが溺愛するのも頷ける。

まあ、家の娘ほどじゃないけどな!

なんせ、家の娘は超絶的に激プリティだからな!!

……

……

蘇生後アリシアちゃんを寝かせ、ミセス・テストロッサと今後について離していたのだが……

私はこれからどうしたものかな。

この世界じゃ身分証明もないし、住む場所もないし、困ったな。

「ねえ、貴方はこれからどうするのかしら？」

「さてな、この世界じゃ私の身分証明なんぞ何もないしな」

「なら、ここに住まない？」

「ここにかな？」

「……ええ、アリシアを蘇生してくれたし、私の病も治してくれて、更には私の間違いを正してくれたのだから、せめてものお礼よ。」

「まあありがたいんだが、本当にいいのかな？」

「ええ、それに男手があつた方が何かといいもの」

「ふむ、それもそうか。まあ、アリシアちゃんの事も心配だしな。分かった、ならばミセス・テストロッサのご好意に甘えるでしょう。」

「

「それと、私の事は……その、『プレシア』と名前で呼んで頂戴」

「いいのかな？」

「ええ」

「分かった、ならば私の事も、タカシと呼んでくれ」

「ええ、これからよろしくお願いするわ、タカシ」

「ああ、こちらこそよろしく頼むプレシア。と、そろそろアリシアちゃん眼を覚ましてる頃だろう、一度様子を見に行ってみるか。」

「ええ、そうね」

……

……

■■■■■■■■■■プレシア私室■■■■■■■■■■

プレシアの私室に入ってみると、お、どうやら眼を覚ましたようだな。

しかし、まだ呆けているな。

まあ、無理も無い。

相当長い間肉体から魂が分離していた訳だしな。

意識がはつきりするまで少々時間が掛かるだろう。

「アリシアちゃん」

「あ、お兄ちゃん……」

「どうやら眼が覚めたようだね」

「……えと、ここは？」

「アリシアちゃんのママの部屋だよ」

「へ？」

「アリシア！」

ガバッ！

「ママ？」

「そうよ、ママよ！ ああ、またこうして貴女を抱きしめる事が出来るなんてっ！」

「……ママ……ママア！」

ふむ、万事目出度しといったところか、よかったよかった。どうやら、アリシアちゃんもしっかり記憶はあるようだな。

蘇生のショックで記憶飛んでたらどうしようかと思ったが。
しかし、やっぱり親子の再会というのは何時見てもいいものだ。
私も娘を思い出すな……

「タカシ、本当にありがとう、なんとお礼を言えば……」

「構わんさ、ただ、あの条件だけはちゃんと守ってくれ」

「ええ、勿論よ、誰にも貴方の事は話さないわ」

「ならいいさ。ああ、それと、もう一人の娘であるフェイトちゃんちゃんと抱きしめてあげる事だ。」

「ええ、私の『もう一人の娘』だもの、全力全開で愛して見せるわ！」

「ふふ、なら安心だな」

「……ねえ、ママ、もう一人って？」

「貴女の妹……になるのかしらね」

「妹？」

「そうよ、アリシア」

「会いたい！ すぐ会いたい！！」

「もうすぐここへ来るわ、そうしたら会わせてあげるわ」

「えへへー楽しみ」

やれやれ、蘇生したばかりなのに元気な事だ。

まあ、これでこの一家も幸せになれるだろう。

もう一人の娘であるフェイトちゃんも、これからきつと笑顔でいてくれるだろうな。

しかしだな、さっきの『全力全開』ってフレーズ、どこかで聞き覚えがあるんだが……

うゝむ、なんだったかなあ……

……
……

その後、件のフェイトちゃんとその使い魔のアルフ戻って来た。

その際プレシアが彼女に今までの事への謝罪とこれからは娘として大事にすると話した。

フェイトちゃんは、泣きながら喜んでいたな。

アリシアちゃんもだが。

アルフはかなり驚いていたようだ、プレシアの変わりように。

まあ、私が説得したと言ったら随分と礼を言われたがね。

とはいえ、親子の仲直りのシーンは何度見てもいいものだ。

きつと、これからは幸せになれるだろう。

……
……

暫くしてアリシアちゃんもフェイトちゃんやアルフと挨拶を交わした。

死んだはずの姉が生きている事にはじめはびっくりしていたが、すぐに打ち解けたようだ。

まあ、私が蘇生した事は一応は話したけど、内緒にするようお願いしたところ素直に聞いてくれた。

うん、アリシアちゃんと違って大人しい娘だな。

これは姉妹揃って美人になるな。

それに、なんと言えればいいのかフェイトちゃんは保護欲をそそられるな。

まるで、子犬のようだ。

それと、私も今後ここに一緒に住む事を離しておいた。
三人とも快く了承してくれたようだ。

「まあ、という訳でこれからはよろしく頼むよ」

「は、はい」

「うん、お兄ちゃん！」

「よろしく頼むよ」

その後も和気藹々と話していたのだが、今後どうしていくかを話し合ったところ地球の『海鳴市』へ行く事になった。

名前からして日本のようだ。

よもやまた日本の土を踏めるとは、思いもよらなかったな。

既にハルケギニアで骨を埋める覚悟は出来ていたし、実際に向こうで一生を終えた訳だが、いやはや実際こうして日本に戻れるとなると感慨深いものだな。

そしてなぜ日本に行くか理由を聞いたところ、地球はここから一番近い管理局の手が及んでいない管理外世界である為らしい。

本来なら管理外世界なぞ行く必要はないらしいが、プレシアが集めていた物はどうやら違法性のある物らしく管理局に見つかると厄介なんだそうだ。

そんな代物を娘に探させるとはな。

まあ、過ぎた事を言ってもしょうがないし、今後のためにいろいろ準備しないといけないな。

「では今後海鳴で暮らすとして、色々準備をしないとイケないな」

「そうね、戸籍とかも偽造しないとイケないし」

「まあ、その辺はプレシアに任せる」

「そ、そうね、任せて頂戴」

「頼むよ。それとフェイトちゃんとアリシアちゃんは学校行かないとな。」

「学校？」

「そうだ、まあ、勉強は別にどうでもいいが友達作らないとな」

「楽しみ」

「うん、そうだね、姉さん」

友達は何よりも大切だからな。

最後の最後で助けてくれるのは親兄弟よりも友達だ。

まあ、この娘らならば問題なく友達出来るだろう。

男が近づいたら、勿論即効で消すがな……ふふふ……

ああそうだ、プレシアを若返らせておいた方がいいな。

今のままじゃ、アリシアやフェイトと釣り合いが取れないからな。

「それとだなプレシア」

「何かしら？」

「お前を若返らせるぞ」

「へ？」

「『サンス・オブ・タイム』！」

シュン！

「あ、あの、何をしたの？」

「時の砂の呪文を使って肉体年齢を巻き戻したのさ。おおよそ、二十四歳くらいまでな。」

「へ？」

「せっかくなんだから、若い方がいいだろ」

「ちょ、ちょっと待って、そんな事！」

「鏡を見てみるといいぞ」

プレシアが鏡を見て、自分が若返っている事に大いに驚いていた。
プレシアもやはり美人だな。

憑き物が落ちて、本来の美しさが現れた感じが。

「……デタラメだと思ってたけど、ここまでデタラメなんて」

「そうかね？」

「管理局の連中が聞いたら血相変えて飛んでくるわよ」

「そんな連中に掴まりはしない。それに私は犯罪なんて犯してない
しな。」

「そんな理屈が通る連中じゃないわよ」

「大丈夫さ」

管理局だかなんだか知らんけど、義母上の本気モードに比べりやど
うって事あるまい。

なんせあの人、バハムートとも正面から渡り合ったからなあ。

どこまでバグ化すればいいのかと、ジョゼフと二人で頭抱えたもん
だわ。

まあ、あいつもあいつで結構チート化してたがな。

そういや、あいつも和解した後はシェフィールドと滅茶苦茶仲が良
かったよなあ。

傍から見ても、バカップルそのものだったし。

イザベラがよく愚痴をこぼしてたっけな。

「んじゃ、これから地球で暮らすって事で」

「そうね」

「楽しみだね、フエイト♪」

「うん、姉さん」

「あたしゃ、犬の姿で居たほうがよさそうだね」

「そうだな」

さてと、これからはこの人達と暮らす訳か……………

まあ、アリシアちゃんもフェイトちゃんもいい子だからな。

可愛がるとしよう。

プレシアも憑き物が落ちて、本来の優しい人格に戻ったようだし。

これからは何かと大変だろうけど、まあ、なんとかなるだろう。

頑張りますかね、彼女達の為にも。

外伝：リリカルな世界だったら！前編（後書き）

多分、中編と後編を書くと思います。まあ、ジュエルシード事件そのものがうやむや状態ではありますが、日常적인感じになりますでしょうか。

ちなみに、プレシアは魔改造して主婦させますw

まあ、外伝ならではのノリということでw

外伝：リリカルな世界だったら！後編（前書き）

今回はリリカルな世界だった場合の後編です。
かなり無理矢理終わらせた感じです。

まあ、外伝ですので、どうか一つ……

外伝：リリカルな世界だったら！後編

さて、海鳴市に居を構えてからはや二ヶ月が経過した。

その間、色々と忙しかったが概ね平和そのものだ。

それと、プレシアと私とで会社を興す事になった。

会社の仕事内容としては、精密機器の製造販売だ。

プレシアは元々科学者という事もあり、こういった開発などは得意であるし、材料などは私が錬金で作れるので、正直なところ材料費は掛かっていない。

この為、諸経費を抜かせばかなりの利益になる。

まあ、取引相手が地球だけではないというのもあるのだが。

そして、アリシアとフェイトは無事に小学校へ入学。

アリシアは病気の為成長が遅れているという事にして、フェイトと同じ学年に入学させた。

まあ、二人共頭はいいようなので問題はないだろう、日本語などには苦労しているようだが。

それと早速だが二人に友達が出来たようだ。

名前は『高町なのは』『アリサ・バニングス』『月村すずか』の三名だ。

このうち、高町なのは嬢は例のジュエルシードの一件でフェイトとすでに顔を合わせていたようなのだが、私が事情を話したところどうやら納得してくれたようで、今ではフェイトやアリシアのよき友達となってくれている。

それと、月村すずか嬢だが……恐らく普通の人間ではない。

あの特有の濃厚な血の匂いは……吸血種だろうな。

だからといってあの子をどうこうするつもりは一切ない。

話してみたが、あの娘はとてもいい子だ。

それと、アリサ・バニングス嬢はなんというか、ルイズにそっくりだ。

あのツンデレなところなどもな。

おかげで、ついつい頭をなでてしまう。

アリサ嬢もとてもいい娘で、安心して二人を任せられる。

後、プレシアと私との関係だが、一応同棲している事もあり体外的な面もあるので『夫婦』という事になっている。

妙な噂が立って、学校で二人が苛められたりしたら大変だからな。

まあ、プレシアは随分と恥ずかしがっていたが二人の為でもあるし、それにまんざらでも無い様だ。

私としてもプレシアに惹かれている。

私自身もまんざらでは無いしな。

まあ、この世界で生きていく以上、独り身というのも寂しいしな。彼女と本気で結婚するのも悪くない。

このような感じで、数日を過ごしている。

今のところ管理局とやらも来ないし順調だ。

さてと、今日は皆で近くの店に出掛けるんだったな。

確か、なのはちゃんのご両親が経営されている店らしい。どのような店か楽しみだな。

「さてと、私は準備出来たぞ」

「ああ、もう少し待って頂戴」

「ママ遅いー！」

「母さん、ゆっくり準備してね」

本当に正反対な姉妹だな。

まあ、どちらも頗るいい子だし可愛いのだがな。

「お待たせ、行きましょう」

「ああ」

「パパ、肩車して！」

「よし、いいぞ、そら！」

「あは、高い！」

「……いいなあ」

「ほら、フェイトも手を繋ごうか」

「う、うん！」

ふふ、本当に可愛い子達だ。

これなら、父親として生きるのも悪くはないな。
プレシアもいい女性だしな。

……

……

■■■■■翠屋■■■■■

さてと、ここがなのは嬢のご両親が経営する翠屋か。
なかなかいい店だな。

繁盛しているようだし。

「わあ、美味しそう！」

「こらこら、アリシア、はしたないぞ」

「だって、パパ」

「全く、しょうがない子だな」

「いらっしゃいますー！」

「あ、なのはちゃんだ!」

「アリシアちゃん、フェイトちゃん!」

「どうも、お邪魔するよ、なのはちゃん」

「お邪魔するわね」

「あ、こんにちわ!」

「おや、なのは、お友達かい」

「うん、お父さん」

「これはこれは、なのはちゃんのお父さんでしたか、家の娘二人がなのはちゃんにはお世話になっております。」

「これはどうもご丁寧に、高町士郎です」

「妻の桃子です」

「藤崎充と申します」

「プレシア・テストロッサです」

「いやはや、ご両親若いな。」

特に奥さんはどうみてもなのはちゃんの母親って年齢じゃないな。若さの秘訣でもあるんだろうか……謎だな。

「今日はどうしたの?」

「うんとね、パパ達とお出かけ!」

「なのはの家のお店、ケーキとか美味しいって聞いたから」

「そうなんだ」

ふふ、仲がいいな。

やっぱり友達を持つのはいい事だ。

フェイトも明るくなったようだしな。

「それにしても、いいお店ですね」

「ありがとうございます♪」

「パパママこれ美味しいよ！」

「ほんとだ、美味しい、父さん、母さん、美味しいよ！」

「やれやれ、まだ色気より食い気といったところか」

「ふふ、そうね」

「では、私達も席に着くとうとうか、あ、すみませんコーヒーをブラックでいただけますか。後は、何か軽く摘めるものでお勧めがあればお願いします。」

「私は紅茶をお願いしますわ」

「畏まりました♪」

なのはちゃんはお店の手伝いをしているのか。

うむ、しっかりした子だな。

まあ、アリシアもフェイトも勉強しながらプレシアの手伝いをして
いるようだな。

家事も少しずつ覚えてきているしな。

しかし、何れは嫁に出すのか……切ないものだな。

「なのは」

「なのはちゃん、遊びに来たよ♪」

「アリサちゃん、すずかちゃん、いらっしやい♪」

「あ、アリサとすずか！」

「二人とも来たんだ」

「アリシアにフェイトも……あ、おじ様とおば様も」

「こんにちわ♪」

「はい、こんにちわ、お嬢さん達♪」

「ふふ、こんにちわ、二人共」

それから暫くの間、娘達はお友達三人と談笑していた。
私とプレシアは二人でのんびりとしていた。

「幸せね」

「どうしたんだ、いきなり」

「ふふ、私がこうしてのんびり紅茶を飲んでいるなんて、少し前からすれば信じられなくて」

「そうか、まあ、幸せというのは得てしてこういった日常にこそあるものだからな」

「そうね」

「子供達がああして笑顔でいて、何れ成長し、子を成していく……親としてはこれ以上の幸せはあるまい」

「ふふ、ほんと、貴方に出会えて良かったわ」

「そうか」

……私はきつとカトレア達の事を忘れる事は出来ないんだろうな。

このまま彼女と暮らし、いつか彼女との間に子供が出来たとしても、心の中にはきつと何時までもカトレア達がいる事だろう。

彼女と本気で夫婦になるのなら、勿論彼女を全力で愛するが、きつと、時折思い出して泣くのだろうな……

よし、決めた、彼女と一緒になろう！

このまま夫婦ごっこをしていたもあれだし、何より私はプレシアに惹かれていたんだしな。

ここははつきりと男として彼女に想いを伝えよう。

「パパ……どうしたの？」

「ん？ ああ、プレシアと本気で結婚しようと考えていてね」

「……へ？」

「だから、プレシアと結婚したいと言ってるんだよ」

「……ほ、本気なの？」

「勿論だ、私はプレシアに惹かれている、いや、『愛しているよ』だから、結婚しよう」

「……………う、ぐす……………嬉しいわ」

「じゃあ、これで本当にパパはパパだ！」

「はは、そうだな、フェイト！」

「なに、父さん」

「私とプレシアだがな、本気で結婚する事にしたぞ」

「え？ そ、それじゃ！」

「ああ、これで私達は本当の『家族』だ」

「パパ！」

「父さん！」

「おわつと！ ははは、これからもよろしくな、私の可愛い娘達」

「うん！」

「プレシアも、よろしくな」

「ええ、あなた……………！」

ふふ、これでいいんだろうな。

しかし、これから賑やかになりそうだな。

……………
……………

プレシアと結婚してから、早一ヶ月が経過。

プレシア達も私の苗字を取り、『プレシア・F・テストロッサ』『アリシア・F・テストロッサ』『フェイト・F・テストロッサ』と改名。

本当の意味での親子となった。

アリシアもフェイトも、学校では多くの友人が出来たようで毎日幸

せそうだ。

そういえば、プレシアが言うには地球付近に管理局が来たようだ。恐らくは以前プレシアが集めていたジュエルシードの回収だろうとの事。

とはいえ、なのは嬢の同行を監視していたところ、競う相手もいなくなつた為かジュエルシードの回収自体はほぼ終わったようで、既に粗方の物は管理局へ引き渡したようだ。

本来ならそれで終わりなのだろうが、管理局としてはなのは嬢を引き込みたいようだ。

彼女自身も、管理局を手伝う事については吝かでは無いようだ。とはいえ、彼女はまだ九歳だ。

血生臭い世界に入るには早すぎる。

それに、ご両親の承諾も得なければならぬだろう。これは一度彼女を説得せねばなるまいな。

「フエイト」

「何、父さん？」

「明日、なのは嬢を家に呼んでくれるか」

「なのはを？ いいけど、どうして？」

「何、彼女が管理局へ入る前に少々話しておかねばと思ってな」

「うん、わかった」

お節介なのかもしれんが、彼女のような子供がそんな殺伐とした世界に入ろうとしているのを黙って見過ごす訳にはいかん。

せめてご両親にはちゃんと説明しなければな。

……

……

そして次の日、フェイトがなのは嬢を連れて来た。
名目は遊ぶ為という事になっているようだ。

「やあ、なのは嬢、いらっしやい」

「あ、おじさん、おばさん、こんにちわ」

「ふふ、いらっしやい」

うゝむ、なのは嬢もやはりなかなか可愛い娘だな、まあ家の娘程では無いがな！

と、いかんいかん、娘自慢をしている場合では無いな。

早めに彼女の説得を終わらせよう。

「なのは嬢、ちょっといいかね」

「はい？」

「単刀直入に聞こう、君は管理局へ入るつもりかね？」

「……えと」

「ああ、気にするな、私も魔法の事は知っている」

「そ、そうだったんですか……えと、出来るならお手伝いしたいな
つて」

「ふむ、ご両親には説明したのかね？」

「……え、えと……その……」

やはり説明はしていない訳か。

まあ、魔法の事などなかなか説明出来る事では無いだろうからな、
致し方ないと言えるのだが……やはり、同じ娘を持つ親としては放
つてはおけん。

確かに彼女は才能に関しては相当なものだ。

だからといって、絶対に怪我をしない保障は無い。

下手をすれば死ぬ事すらもあり得る。

そんな荒事に娘が首を突っ込もうとしているのを、ご両親が知らないのは非常に問題だ。

ここは一つ、諭してやらねばな。

「管理局へ入るつもりなら、先ずご両親を説得しなさい」

「えと……」

「魔法の事を説明するのは難しいだろうが、ご両親には君が何をしようとしているのか知る権利がある」

「……」

「君とてご両親に心配はかけたくはないだろう？」

「はい……」

「ならきちんと説明して、ご両親にちゃんと了解を取りなさい。そうでなければ、君にもしもの事があった時、ご両親を悲しませる事になるよ。」

「……わかりました、お父さんとお母さんにちゃんと話します」

「そうしなさい、ああ、その時は管理局側の人にも同席して貰うといい。彼らが君を欲する理由は、彼ら自信に説明させるべきだからね。」

「はい、わかりました」

「さ、私からの話は終わりだ、フェイトとアリシアと遊んでおいで」
「はい」

彼女は嘘は言えないタイプだから、説明すると言った以上はちゃんと説明するだろう。

問題は管理局の連中か。

どうもきな臭い感じがしてならんのだよな、あの連中は。ちゃんと説明してくれればいいのだが。

「あなた、なのはちゃんの事だけど、先にご両親に連絡を入れて置いた方がいいと思うわ」

「ふむ……そうするか」

三人が遊んでいる間に、私の方から高町夫妻に連絡を入れて置いた。魔法の事などは直接言わず、なのは嬢から大切なお話があると伝えておいた。

まあ、あのご夫妻も恐らく何かしら気が付いてはいるとは思うのだが、やはり事前に知っておく方が心構えが出来ていいだろう。後はなのは嬢の説得次第だな。

……

……

それから数日後、高町夫妻より招待を受けたのでプレシア達を連れて高町家にお邪魔する事になった。

「藤崎さん、このたびは娘がご迷惑をお掛けいたしました」

「いや、構いませんよ。なのは嬢からの相談というのはどうでしたか？」

「ええ……それなんです……」

なのは嬢としては、どうにか管理局を手伝いたらしい。

まあ、人間得てして力を得て出来る事が増えると、どうしても試し

たくなるものだ。

とはいえ、ご両親的には止めて欲しいようだ。それはそうだろうなあ、自分の娘を態々危険な場所へ送り込む訳が無い。

「そうですか」

「あれもなかなか頑固でしてね、一度決めた事はそう簡単には曲げないものですから」

「とはいえ、親としては心配ですな」

「ええ……出来れば止めて欲しいんです」

「確かに小学生の間から、そのような危険な場所に行くのは承知出来るはずありませんな」

「仰る通りでして……」

「そういえば、管理局でしたか、そちらの代表者なりは来たのですか？」

「はい……しかし……」

士郎氏が言うには、どうにも信用出来ないんだそうだ。なんというか、誘導されている感じを受けているらしい。ふむ……そうまでしてなのは嬢が欲しい訳か。

「とはいえ、普通に考えれば就業年齢でもないですからね、親の権限で却下して構わないでしょう」

「そう、ですよね、やっぱりそうですよね」

「勿論です。まあ、高校を卒業した後なら、彼女の自由にさせてもいいとは思いますがね」

「ええ、最低でも高校は出ておいた方がいいですね」

「当然です、そうでなければ社会に出て困るのは彼女自身ですからね」

「やはりそうですね、いや、藤崎さんと話しているとなんだか自信

「が付きますね」

「ははは、お役に立てたなら幸いですよ」

この話し合いの結果、親の権限で管理局入りは却下となったようである。

まあ、なのは嬢はなかなか納得していなかったが、自分が今はまだ子供であり責任を持てる立場ではない事を根気よく説いたらしい。その結果、なんとか高校卒業までは待つように説得出来たようだ。高校卒業後は、管理局へ入るかどうかは好きにして構わないという事らしい。

とはいえ、その際、士郎氏直々にテストをするそうだ。

土郎氏はなかなかの使い手だからな、彼に勝てる位ならまあ管理局でもなんとかやっていけるだろう。

やれやれ、これで一先ずの心配事は片付いたかな。

■ ■ ■ ■ ■ 十年後 ■ ■ ■ ■ ■

それから、特に問題も無くゆるやかに日常が過ぎていった。

プレシアと合同で作った会社も軌道に乗り、今では世界でも有数な精密機器メーカーに成長。

かなりの利益を上げている。

それと、バニングス家や月村家とも相も変らぬ付き合いであり、先日もバニングス夫妻主催のパーティに出席したところだ。

いやはや、相変わらず上流階級のパーティは肩がこる。

それと、ジュエルシードの回収が終わった後も幾つか事件があり、その中で『八神 はやて』という子とアリシアとフェイトが友達になつたようだ。

その子は、持っていたロストログニア『闇の書』が原因で足の麻痺を起こしていた。

それを治す為に、闇の書の守護騎士が暗躍していたのだが、その際フェイトに手を出そうとした為、私が捕獲して事情を聞きだした。まあ、相当怯えていたがね。

その結果、私のミョズニルンの能力を使い闇の書の破損部分を確認、プレシアの協力の下、徹底的に修復し元の『夜天の魔道書』に戻した。

というか、既にプレシアは知識面でチート化しており、修復不可能と思われた闇の書を一人で修復してしまった。

流石は私の妻だな。

その結果、彼女が抱えていた足の麻痺も治り、今では頗る元気だ。守護騎士達も、今では彼女と共に暮らしている。

まあ、その中の管制人格である『リインフォース』にやたらと気に入られてしまい、今では『グランドマスター』と呼ばれている。

何故だ……

まあ、そんな事件もあったが、フェイトとアリシア、それとはやて嬢はそれぞれ大学へ進学。

なのは嬢は、やはり自分で決めた道を貫くつもりなのか、管理局入りを果たしたらしく今は訓練に明け暮れているようだ。

あ、そうそう、そういえば、なのは嬢経由で二人の子供を預かる事になった。

彼女自身も、子供を戦場に出したくないとの事で、管理局と関わりの無い家に預けようとしたらしい。

まあ、そういった事情もあり、二人を預かる事となった。

名前は『エリオ・モンディアル』と『キャロル・ルシエ』

両名とも素直で非常にいい子だ。

プレシアは息子と娘が増えて非常に喜んでいる。

それと、これが一番重要だがプレシアとの間に昨年女の子が出来、先日産まれたばかりだ。

名前を『カトレア・F・テストロッサ』

そう、私の最愛の妻の一人と同じ名前だ。

これからの成長が非常に楽しみだ。

まあ、このような訳で我が家も順風満帆。

この世界に来た当初はどうなるかと思ったが、今では本当に幸せだ。やがては、子供達も巣立っていくのだろうが、それまでは父親としての幸せをかみ締めよう。

外伝：リリカルな世界だったら！後編（後書き）

あはは、子供できちゃいましたね。つか、最早原作は完璧に崩壊してますな。

フエイトは管理局に入っていないし、はやてもだしで……もう滅茶苦茶です。

まあ、実際に書く事になっても、この通りにはいかないでしょうね。これはあくまで外伝で事で、どうか一つよろしく願います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1076r/>

オタリーマンのゼロ魔生活外伝集

2011年5月17日02時55分発行